
FLAVOR OF THE SCIENCE

風邪布名論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FLAVOR OF THE SCIENCE

【Nコード】

N4731V

【作者名】

風邪布名論

【あらすじ】

2011年08・02 ネット小説SNS dNovelsにて

全話掲載

第一話 めぐりあった二人

大きな雷が街を激しく照らしていた。

今にも泣きだしそうな空。

あたり一面に真っ黒な雨雲がたちこめて、午後四時の風景を狂わせ
ていく。

まるで夜の景色が出番を間違えたかのように。

ここは兵庫県宝塚市小林にある佐藤研究所。

名前こそ研究所とは名乗ってはいるが、どこにでもあるこの四角い
建物は、傍からみれば、ごく普通の一軒家にしか見えない。

そんなどこにでもある建物の薄暗い一室の中で、白衣を羽織った白
髪の妖しげな老人と、茶色いポニーテールにセーラー服を着た15
歳の少女がなにやら奇妙な実験をしていた。

「博士、あとはこれに電気を通すだけです」

「美香くん、よくここまで私についてきてくれたな。ようやくこれ
で私の実験も完成だ」

「いえ、いいんです。私も博士の研究が手伝えてうれしいです」

老人は美香の言葉にすっかり涙ぐんで白い袖を目に当てると、はっ
と我に返った。

「いや、いかん……すっかり湿っぽくなってしまったな。美香君、

それでは電源を入れてくれ」

「はいっ」

美香は元気一杯に返事をする、ちらかった机のそばにいて、山
積みになっている書類をかき分け、その中から現れた電源装置の赤
いレバーに手をかけた。

「それでは行きます」

だが次の瞬間、庭に面した窓ガラスが大きな音を立てて割れた。
パリンッ。

空中に散らばるガラスの破片。

乱反射する光の粒子。

そして、その中を一つの黒い影が大きな羽を振動させて通過していく。

その影は狭い部屋の中をぐるりと一周すると、やがて二人の目の前にある作業台の上で立ち止まった

ドタッ。

「な、なんだお前は……？」

しわくちやの博士の瞼の先には、全身にアメ茶色の甲冑をまとったカブトムシの怪人がいた。

体長は1m60ほど。

だが見事なまでに鍛えあげられたそのボディには、まるで戦国時代から蘇った鎧武者のように異様な殺気が漂っていた。

「伊東博士よ、我らブラックスターズに牙を剥くとは許しがたき行為、死をもって償うがよい」

「なんのことだ、わたしにはなんのことかさっぱりだ」

だが怪人は――

「問答無用だっ」

そういつて、頭の角度を少し上げると、頭上の触角を老人に向かって発射した。

パシュッ。

サイレンサーをつけたピストルのように乾いた音が部屋に響く。

そしてそれと同時に、怪人の放った触角は見事に老人の胸を食い破っていた。

「うおお……」

胸に深く突き刺さった刃を握りながら、ゆっくりと地面に崩れ落ちる老人。

「博士――」

美香はそういつて博士のそばによると、侵入してきた怪人を睨みつけた。

「あんた、何すんのよー？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ、我らブラックスターズに逆らうからじゃ。お前も殺されなくなったら、早く例のモノを渡すのだ」

「何よ、何のこと？ 例のモノって？」

「とぼけても無駄じゃ、我らをせん滅するため、伊東博士がひそかに研究を重ねてきた秘密兵器がここにあるはずだ」

「あの一、それ、お隣ですけど……」

「ヒヤッヒヤッヒ……、えっ？」

高笑いをしていた怪人の目が大きく縦に開く。

「あの一、ここは6 7 6じゃないんですか？」

怪人が手のひらに握りしめた住所と美香の顔を交互に見る。

「そうだけど、隣の家とウチは番地が同じなの。あなたが言ってるのは隣の伊東研究所のことでしょ？ ちゃんと表札読まなかったの？」

「す、すいません、漢字が読めなかったもので……。それに窓から侵入しましたし……」

「すいまして済むかー。なにうちの博士殺してくれてんのよー。世界征服だかなんだかしらないけど、ちゃんと責任を取りなさい。家はどこなのか？」

「そ、それは……」

怪人はその場に正座をしてすっかり小さくなっている。

だが、その時、怪人の懷から携帯の着信音が鳴った。

曲名は「エリーゼのために」だ。

「あ、着信が……。すいまして何と詫びればいいのか分からないんですが、とにかく今度、菓子折りもって来ますんでー。それではっ。アディオス」

そういつて、怪人は慌てて立ち上がると、再び違う窓を突き破って表へと飛び出していった。

「菓子折りで済むか、しかも違う窓破るなー、同じ窓使えーっ」

だが、美香の必死の叫びもむなしく、恐るべき脚力を披露して、怪

人は妖の目の前から姿を消した。

数分後、落ち着きを取り戻した美香の前には、今までともに研究をつづけてきた博士が穏やかな顔で横たわっていた。

「博士ー」

美香の声が静かな部屋に響いていく。

佐藤博士は美香の父親とは遠い親戚の関係にあった。

どっかのマンガで聞いたような設定だが、事実なのだから仕方ない。

父親の話によると、なんでも佐藤は研究用に借りていた川西のテナント施設で実験中にボヤ騒ぎを起こし、逃げるようにして宝塚までやってきたらしい。

迷惑な話だ。

だが、興味本位で科学の世界に首を突っ込んだ美香にとって、佐藤は、一人の恩師であると同時に第二の父親のような存在でもあった。美香の目からはとめどなく涙が零れおちていく。

「死んじゃやだよーっ」

だが、次の瞬間、息を引き取ったかに見えた博士の体が少しだけ動いた。

「は、博士？」

美香が慌てて博士のそばにかけよる。

しわくちやのまぶたがうつすらと目を開ける。

「美香くんか……。ワシの研究は間違っていたのかのー？」

美香は小さく震える博士の手を強く握りしめる。

「そんなことないです。博士の作ったこの『往復ビンタ目覚まし機』は夜の街を練り歩くサラリーマンならびにOL・最近の乱れた女子高生たちにとって、必須アイテムになるに違いありません」

「それはよかった。ワシはのう……」

「もう喋らないでください。傷に障ります」

だが、そこから二時間、博士の思い出話は延々とつづいた。

初めてレモンで電球を光らせた話。

また15歳でスカートめくり機を完成させ、ナーベル平和賞に史上最年少でノミネートされた話。

そして美香はといえば、自分の涙をすっかり使い果たし、軽蔑した目で博士を睨んでいた。

「それでな、ワシが35の時……」

「ていうか、博士。大丈夫なんですか？ もう二時間近く喋ってますけどー？」

「……はて、美香くんには言わなかったかのー？ ワシの体はサイボーグで出来ておるんじや」

「何ソレ？ 何なの、その無駄に凄い設定は？」

「今日みたいに命を狙われたらかなわんからのー」

博士は顎にたくわえた白いヒゲを感慨深げにさわっている。

「誰も狙わねーよ、こんな研究っ」

だが、博士は急に真面目な顔になる。

「とにかくじゃ。こんなことがあった以上、もう研究を続けるわけにはいかん。ここいらで引退するでしょう」

「なに言ってるんですか、博士はサイボーグなんでしょう？ だってこれから私も私と研究を続けさせてください」

だが、博士は静かに首を横に振る。

「いや、研究はもういい」

「えっ、どういうことですか？」

博士につられて、美香も真面目な顔になる。

「もう疲れたんだよ」

「博士……」

「昨日の夜も寝てないし……」

「って、そんな理由かよっ？」

こうして、美香はなんだかわけがわからないまま、研究所を解雇されてしまった。

そして、翌日。

土曜日、朝八時。

美香は玄関で靴を履きながら、台所にいる母親に大きな声で挨拶をしていた。

「それじゃーお母さん、行つて来まーす」

「あら、美香、今日も学校？」

台所から玄関へ向かつて近づいてくるスリッパの音。

「違うのー、ちよつと用事」

白いプリントTシャツに紺色のジーンズを履いた美香の母親が、タオルで自分の手を拭きながら玄関までやってきた。
どうやらさっきまで洗い物をしていたようだ。

彼女の名前は百合子。スポーティな服が似合うとてもフレッシュな母親だ。

20代といってもまだまだ通用しそうな雰囲気を持っている。

「あら、なーに？ ひよつとして今日はデート？」

百合子は娘のオシャレな服装に、大きな瞳を輝かせる。

ピンクのシャツに、短めの明るいベージュのパンツ、緑とオレンジのカラーリングが左手の手首を飾り、モデルのようにすっきりとしたスタイルと透き通るような白い肌が、このファッションの良さをさらに引き立てている。

「ちがうわ、文句を言いに行くだけよ」

「ええ、それどういうこと？」

「私が研究をしたところが、昨日、隣の研究所と間違えて怪人に潰されちゃったの。だからいまから文句を言いに行くのよ」

美香のパッチリとした目がキラリと光る。

ノーマイクにもかかわらず、大きく輝く瞳とキレイにまつすぐに通った鼻筋はハーフである百合子の影響かもしれない。

「あらそうなんだ？ 大変ねー」

だが、母親は見た目とは違いかなりノホホンとした性格をしている。

美香とはまったく正反対だ。

「そうなの、止めても無駄だからね」

美香は裸足のまま赤いスニーカーを履きおえると、つま先でトントんと地面をけた。

「ハイハイ。わかりました。わかったけど……、絶対、手だけは上げちゃだめよ。約束ね。そのかわりコレをもっていきなさい」

百合子は笑顔のまま小さくうなずくと、傘立ての横に挿してある銀色の金属バットを美香に差し出した。弟の正のバットだ。

傷だらけのボディには黒いマジックで？夜露死苦？と書かれてある。

「頭に4発までならOKよ」

「なんか私より物騒なんだけど……」

ピンポン。

美香がボタンを押すと、中からインターホン越しに男の声がした。思ったより若い声だ。

「はい。どちらさまで？ 新聞の勧誘ならお断りだよ」

「いえ、私はとなりの研究所で助手をしているものなのですが……」

「はあ、それはどうも、何かご用ですか？」

男はけだるそうな声で応対を続けた。

「実は……大変いいにくいことなんです、昨日ブラックスターズがお宅の研究所と間違えてうちの研究所を……」

「申し訳ありませんが、このインターホンは現在使われておりません。インターホンのスイッチをお確かめになってもう一度……」

「ちょっとー、なんで急に間違い電話みたいになってるの？ さっきまで普通に喋ってたでしょーがっ？」

男はインターホンのそばで大きくため息をつく、そのまま話を続けた。

「面倒くせーな、まっ、ブラックスターズに関することなら仕方な

いか……。よろしい入ってくれたまえ」

インターホン越しにそういうと、突然、目の前の鉄扉が自動で開き始めた。

「おおつ、全自動？　うちより研究所っぽい」

だが、美香が門をくぐると、中の建物はもつと研究所ぽかった。

白い建物全体に緑のつる草が巻かれ、すべての窓ガラスが内側から茶色いダンボールで目張りされている。

美香は土の上に等間隔に置かれた敷石をたどって正面玄関の前にたどりつくと、茶色い木目のドアがみえた。

ドアの真ん中にはなぜか、丸い小型のスピーカーがついている。

「え、なにこれ？　開けていいの」

「突然ですが、ここで、クイズです」

そのとき、スピーカーから声がした。

「わつ、ちよつと、何よもう。突然にも程があるわ」

美香はドアの前ですっかり取り乱している。

「歴史、理科、体育、道徳。次の中から、選んで下さい」

「急にクイズ番組みたいになってんだけど。しかも、微妙に科目が偏ってるし。まっ、いいわ、とりあえず　理科でお願いするわ。歴史はなんか苦手だし……」

「それでは、一問目、歴史」

「ちよつとアンタ、人の話聞いてた？　歴史の問題しかないんなら最初から聞くなっ」

美香は目の前にある機械にかみついたが、そのまま問題は続いた。

「伊藤博士の誕生日はいつでしょう？　太陰暦で答えよ」

「っーかそっちの歴史ッ？　そんなもん知るかー。しかも何で太陰暦なのよ？」

そういつて美香が目の前へのスピーカーを怒鳴りつけると、天井から正解のチャイムが鳴った。

ピンポンッピンポンッピンポンッ。

「正解です。そんなもの私にも、わからない」

「自分が分からんのに問題出すなー」

「それでは、二問目です」

「ええーっ？ もう、いったい何問目まであんのよー？」

そういつて、美香がいい加減うんざりし始めたところ、目の前のドアがガチャリと開いた。

中からは、短い髪をセンターで分け、インテリ風のメガネをかけた一人の青年が現れた。年は二十歳ぐらいだろうか？

「そこで何してんだ？」

美香はドアの前でキョトンとしている。

「え、このドア開くの？」

「ああ、普通のドアだからな」

男は腕組みをしながら、あきれた顔をして美香をみている。

「じゃあ、このスピーカーは何よ？」

「ああ、ソレ？ オレの発明品だよ。『クイズマスター』っていう機械。世界のどこにいても頭が鍛えられるんだ」

「紛らわしいモン、ドアにつけんなー。しかもこの機械、ロクな問題出さないんだけどー」

「とにかく、ここで立ち話もなんだし中に入ってくれ」

そういつて、男は美香を中に案内した。

「それで話つて何だ？」

数分後、美香は彼の部屋にいた。

研究所と聞いたから、一体どんなモノが置いてあるのかと思ったが、部屋に入ってみると割と普通だ。

六畳ほどの部屋に勉強机、液晶テレビ、ステレオが整然と並べられ、壁には外国のロックミュージシャンのポスターが貼られている。

キレイに片付いている点を除けば、普通の男子学生の部屋とそうかわらないのではないだろうか。

そして小さな白い卓袱台の上には、紅茶の入った二人分のティーカップが仲良く湯気を立てている。

「ブラックスターズについて詳しく知りたいの。あー、私は北野美香。ヨロシク」

「オレは伊東恭介。以後ヨロシク」

そういつて、恭介は自分が用意した紅茶のカップを傾け一気に飲み干した。

「で、ブラックスターズだっけ。といっても正直オレにもよくわかんないんだけどねー」

「えっ、でも、ここの研究所はあなたが建てたんでしょ？」

「まあ、それはそうだけど……。オレいままで人に恨まれるようなことなんてしたことないしなー」

恭介はくびをひねったまま、考え込んでいる。

「とにかくよ、うちの研究所はあなたのトコと間違えて襲撃されて、潰されちゃったの。私にも知る権利があるハズだわ。あなたが知ってる限りのことを教えて」

美香の必死の説得に、恭介はさらに考え込んでしまった。

そして、その直後、恭介が不意に両手を叩いて目を輝かせた。

「あー、ひよつとして、アレかなー」

恭介は隣の部屋にいくと、四角い赤のボックスに黄色い人間の手がついた不思議な箱を持ってきた。

「これは何？ まさか目覚まし時計とか？」

美香は恭介のソレが自分の研究所で作っていたものとそっくりだったので驚いていた。

「何言ってるんだよ。そんなダサイもんつくるわけないだろ。ひとりじゃんけんマシーンだよ、これで人間が持つ五感の全てを鍛えるんだ。」

恭介にバカにされて、美香は多少ムツときたがそのままグツと堪えて話を続けた。

「それじゃあ言わせてもらいますけど、これはどうやって使うの？」

「いい質問だ。箱の後ろに三つのボタンがついてるだろ？」

確かに箱の背面には『グー』『チョキ』『パー』の三つのボタンがついている。

「そのボタンを押すと、五秒後にその手がボタンと同じ『動き』をするのさ。そして、それにあわせてプレイヤーがじゃんけんをする。どうだ凄いマシンだろう？」

その瞬間、美香の背筋が凍りついた。

（大変だわ、この街、バカしかない……）

美香は軽く咳払いをすると、話を続けた。

「とにかく、これはこれとしてよ、あなたとブラックスターズとどいう関係があるわけ？」

「だからホラ、『お前の才能が怖い』とかーそーゆー感じじゃないのかな？」

「あんたの発想が怖いわー」

恭介は咳払いをして続けた。

「まあ、とにかくだ。ブラックスターズは近いうちにまたここにやってくるだろう。その時に敵討ちをすればいい。それまで君はここで研究を続けるのだ」

「あなたに協力しろっていうの？ ていうかアンタだいたいここで何の研究してるのよ」

「企業秘密だったんだけどな、いいぜ、ついてきな」

恭介はふつと笑うと、さつと立ち上がり美香を隣にある台所へと案内した。

「ホイ、到着」

「なにここ、ただのキッチンじゃない？」

美香の言うとおり、恭介に案内された部屋は、どうみても普通のキッチンにしか見えなかった。

システムキッチンが窓伝いにあり、電子レンジ、食器棚、テーブル

が所狭しと並べられている。

だが、恭介はチツチツと指を左右に振る。

「見た目はね。だが、この部屋には秘密があるのさ」

そういつて恭介はこげ茶色のテーブルに収まっていた四脚のイスをすべてテーブルの外側に移動させると、テーブルで隠れていたフロアリングの隙間に手をいれる。

そしてそれをゆっくりと真上に引つ張り上げた。

すると、一メートルほどの大きなパネルが一気にめくれ、中から綺麗に舗装された地下へとつづく階段が現れた。

「これは？」

「これがホントの秘密基地ってやつさ」

数分後、二人は無言で地下へと続く階段を下りていた。

あたりは真つ暗だ。

というのも恭介が地下室の入口のフタを勝手に塞いでしまったため、恭介が持っている懐中電灯の明かりを除いて、視界はゼロに近い状態となっていた。

「もうちよつとゆっくり下りてくれない？」

美香のか細い声は何倍にもなって、闇の中で響いていく。

「なんだよ、わがままな奴だな」

「なによー。ていうか、照明くらいつけときなさいよ」

恭介の持つ懐中電灯の光が、階段の踊り場を曲がって死角になるたび、美香の心臓はドクンドクンと大きな音を立てる。

「普段はオレしか使わないんだから、コレでいいんだよ。ほらあと10段だ」

一分後、恭介のナビにより二人は無事に地下までたどり着いた。

「ほら着いたぞ、ちよつとそこで待ってな」

暗闇の中で恭介がコソコソと動く。

しばらくすると、「バチン」という重いレバーの音が辺りに響き、

真つ暗な空間に眩しい光が灯った。

どうやら、壁に設置してあったブレーカーを恭介が上げたようだ。

「これでよし……と」

恭介は作業を終え美香の方をむくと、驚きの声を上げた。

「うわっ、ていうかなんだよその汚ない足は」

恭介の指摘通り、美香の裸足は汗と埃で真つ黒になっていた。

「お前、ひよっとして靴を買う金もないのか？」

むっとして美香が反論する。

「ちがうわよ、あなたが勝手に『オレについてこい』って言って先に進んでいくからでしょ」

恭介は地下に置いていた自分専用のスリッパで難を逃れていた。

「とにかくそんな汚い足で中を歩き回られたら困る。ちよっとそこで待ってる」

三分後、恭介は木製の椅子と洗面器と洗浄用の道具一式を持ってやってきた。

「それじゃーこのイスに座って、足をキレイに洗ってくれ」

「えー、なに？ 研究所に入るだけなのにそこまでするわけ？」

美香の問いに恭介が真面目な顔で頷く。

「もう……、わかったわよ、洗えばいいんでしょ？」

美香は少しの間呆れていたが、やがて観念したかのように椅子に座り、洗面器に足をつけて、シャバシャバと自分の足を洗い始めた。ゆっくりとではあるが汚れが落ちていく。

だが、すぐに恭介がそれを止めに入った。

「それじゃ、だめだ」

そして、恭介は美香の細い足首を左手でグイッと掴むと、右手で緑色の液体洗剤をかけて、亀の子たわしでこすり始めた。

ゴシゴシゴシゴシ……。

「ちよっとなにすんのよ、痛いっ……」

美香は眉間にしわを寄せながら、椅子の上で体をくねらせ恭介の動きに身を任せる。

だが、恭介の手には一層力が入っていた。

ゴシゴシゴシゴシゴシ

「だめだ、爪の隙間にまだ汚れが……」

だが次の瞬間、美香の蹴りが恭介の顔面を捉えていた。

地下室の入口には両開きの白い鉄製のドアがあった。

どうやら病院の手術室のドアを真似て作られたようだ。

そして扉を開けると、中はさらに病院ぽかった。

あたり一面が真っ白な壁面で覆われており、部屋の中央には大きな銀色の作業台とベージュのリクライニングシートが配置されている。ここで人体の改造手術でもする気だろうか？

そして天井からは十数本もの太い灰色の線が、むきだしのままぶら下がっており、近くにある大きな黒いボックスへと繋がっている。だがこれだけのものがあっても、全体として狭い感じは全くしない。むしろ結構な広さを感じた。

面積でいえば、軽く20畳はあるのではないだろうか。

「ふーん、ずいぶんと本格的ねー。まさに研究室って感じだわ」

美香が洗いたての真っ白な足でぺたぺたと中を歩いて行く。

「おーいどこ行ってんだよ？ こっち、こっち」

恭介は美香に蹴られて破損したメガネをセロテープで補修しながら、美香を奥の部屋へと案内した。

もちろん恭介の顔に美香のきれいな足型がついていることはいうまでもない。

二人は研究室をまっすぐ突き当たりまで進むと、壁に埋め込まれた大きな水槽にたどり着いた。

「何よコレ？ サメでも飼ってんの？」

「ちがうよ。いいから見てなっ」

そういつて、恭介が壁についている赤いボタンを押すと、急に水槽

の中の水が沸騰し始めた。

ゴボゴボゴボゴボ……。

「こ、これは？」

だが、美香がそう尋ねた瞬間、水槽の中の水色の液体が急に中から飛び出して、美香のとなりに落ちてきた。

そしてその水はみるみるうちに積み重なり人の形になっていく。

「アクアドールだ」

「アクアドール？」

「そうだ。オレが水分子を加工して作ったマリオネットだ」

恭介が説明を続けている間に、アクアドールは170センチほどの高さになった。

「だが、こいつはただ人のカタチをしただけの人形ではない。人間の三倍の体力とスピードを兼ね備え、さらには岩をも打ち砕く破壊力も持っている。そして何より自らが意志を持ち、強靱な精神力で並みいる敵を打ちのめすのだ」

恭介の言葉を裏打ちするかのように、アクアドールは完全体になると、早速自分の意志で会話を始めた。

《ご主人さま、お呼びですか？ ていうか、めっちゃのど渴いたんですけど。ほおおお》

「一体なんなの？ この凄く気だるい感じは？」

「いや実は研究の時、水が少し足りなくてオレンジジュース足したんだよ」

「そういう問題っ？」

「まーとにかくだ、今はこいつの特性を知りたいんだ。これに何を足せば今より強くなるのか」

だが、すでにアクアドールは近くのイスに座りこんでタバコを吹かしている。

「簡単じゃない。性格はヘタレで、改良は不可よ」

恭介は大きくため息をつく、美香の肩をたたいた。

「そんなこといわずに頼むよ、研究費用の大半をこれに使っちゃっ

「たんだ……。」

美香も恭介の必死の説得に渋々うなずく。

「うーん、でもねー……。とにかくこの子の性能を見てみないことには結論は出せないわね」

「いきなり性能を見せろって言われてもねー……。うん？ あ、そうだ」

そういうと、恭介は本棚から近くの町村が載っているくしゃくしゃの地図を取り出した。

年代物か、かなり色褪せている。

「これを見てくれ」

「なによこれ？」

「見ての通り、このあたり一帯の地図さ。そんでもってこの赤いバツテンがブラックスターズの前線基地だ」

「福井町にあったんだ？ ていうか何で敵の基地の場所知ってんのよ？」

「それはオレが天才だからだよ」

恭介はケロッと凄いことをいう性格のようだ。

無論、質問の答えにはなっていない。

「それで、今回狙うのは公園の近くにあるこの平屋の家だ。というわけで、一旦、やつらをこの公園におびき寄せることにした」

だが、恭介の発言に美香が思わず首を傾げる。

「なんでよ？ 場所が分かかってるんなら直接やっちゃえばいいじゃない」

「それも作戦の一つだ。だが、基地がウチのように地下にある場合もある。下手に攻撃をしかけて、逃げこまれても面倒だ。だから今回は、こちらから逆電波を流して敵をおびきよせることにした。というわけで、君は今夜九時にこの公園にいつてくれ」

「ふーん、そんなことが出来るんだ？」

「ああ。そうじゃなきゃ、君の研究所が襲われてウチが襲われない説明がつかないだろう？」

「えっ、ちょっと待って、それじゃあうちの研究所が襲われたのってあなたのせい？」

美香の鋭い質問に、恭介はしまったとばかりに右手で口を押さえて視線を逸らしながら話を続けた。

「あのー、なんだ……、科学は、人類の犠牲の上に成り立っているんだ。だから……、その、君には一時的に迷惑をかけてしまったかもしれないが、長い目でみれば、僕の利益と君の利益はイコールになるんだ。そうだ……そういうことにしよう。そういうわけだからとりあえず納得してくれ」

恭介は両手をポンと叩くと、勝手に一人で頷いている。

「どんないいわけよ？」

恭介は頭をぼりぼり掻きながら続けた。その目はまだきよろきよろと泳いでいる。

「つまりだな。現代の科学は過去の先人たちから受け継いだ共有の財産なわけだ。だから、オレが今している研究も、佐藤研究所の博士から受け継いだものと同じことになる。そう、すなわち、色々あったが結局のところオレと君は仲間なんだ」

恭介の苦しい言い訳に美香があきれた顔で睨む。

「同じ番地のくせに、やってる研究の内容が全然違うんですけど……。ていうか、要するに、あなたは一緒にきてくれないわけね？」

「それはホラ……、今日、見たいテレビがあるし……」

「子供かよっ？　っーか、あんた自分の研究にちゃんと責任持ちなさいよ」

美香はすっかり軽蔑した目で恭介を見ている

「仕方ないだろ、ビデオデッキが壊れて、DVDレコーダーも買う金ないし……」

「科学者ならのそんなもん自分で作れー」

「それは電気屋さんの仕事だろーが」

「どんなツツコミっ？　電気屋は売るのが仕事よっ」

と凄い剣幕で恭介をまくしたてたが、結局、美香とアクアドールの

二人は、その日の夜、問題の公園に集合していた。

夜の九時という多少アブナイ時間ではあったが、放任主義の親のなせる技なのか？

美香は母親の快諾を得て、難なく外出することができた。

おまけに「今夜で、決めて来なさい」という母親の意味深な言葉が妙に美香の耳に残った。

「あーあ。なんて親なのかしら？」

美香は自分の顔を両手で覆いながら、首を左右に振る。

「少しでも反対してくれれば、来なくて済んだのに」

どうやら、美香の言動に、母親が勝手にボーイフレンドの影を見つけて、気をまわしてくれたらしい。

だが、当然、公園にはボーイフレンドどころか、人の気配すらないあるものといえば、公園の中央にある青い滑り台や、美香が座っているベンチの傍で、わずかな風に揺れるブランコぐらいだ。

「もうー、本当に来るんでしょうね」

そういつて美香は近寄ってくる蚊をたたきながら左手にはめた時計をちらつと見た。

《眠いんですけど、もう帰っていいですか？ ほおおお》

そんな中、早くもアクアドルだけが先に弱音を吐いている。

「ちよつとー？ いったい誰のために、ここまで来たと思ってんのよー」

《知らないっすわ。ほおおお》

「ああ、いらいらするわー。ていうか、その癖なんとかならないわけ。なんで語尾に必ず《ほおおお》が入るのよ」

バサバサッ。

その時、茂みの近くにいた何羽かの鳥が一斉に飛び立っていった。

「あつ、誰か来たっ」

美香は慌ててベンチから立ち上がると、その気配に身構えた。

黒い影を身にまとったその生物は、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

そして、公園の真っ白なライトに照らされるとゆっくりとその正体を現した。

「ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ。覚悟するんだな、伊東研究所の諸君」

「いいえ、私は佐藤研究所のモノですけど」

「えっ人違いでしたか？ それはどうもすみません……」

そういつて帰ろうとした瞬間、怪人は聞き覚えのある声に慌てて振り返り、美香の顔をじつと見つめた。

「あれっ、ていうかあなたは昨日の……」

「どうやら覚えてくれてたみたいね。怪人さん？」

そう、そこには佐藤研究所を襲った茶色い甲羅の怪人がいたのだ。

「勘違いだかなんだかしらないけど、昨日はよくもやってくれたわねー。お陰で私は今、大事な研究場所を失った上に、プツン科学者とヘンテコな水人形にとりつかれて、大変迷惑してんのよ。一体どう責任とってくれるのかしら？」

美香は両目を血走らせながら、怪人を睨みつけている。だが怪人の方もいつのまにか逆切れモードに入っていた

「だから、その件は何度も申し訳ないといつとるでしょーが。何べんいったら分かんのか？」

「あのねー、ゴメンで済んだら警察はいらないの。つーか、あんた絶対自分が悪いって思ってたんじゃないでしょ？」

「当たり前だろ。ていうかなんで研究所が並んで建ってたんだよ。意味分かんねーよ。紛らわしいモン近くに建てんな。ピザ屋の兄ちゃんが混乱するだろーが」

「うるさいわね。先に研究所建てたのはうちよ。文句言っんなら、となりの研究所にいつてよ」

「アンタに言われんでも、そのつもりだー」

自分でそう言った瞬間、怪人はハッと我に返り、ようやく本来の用件を思い出した。

「つーかよく考えたら、何であんたがここにいるんだ？　ここに
いるのは本当なら伊東研究所の連中のはずだぞ」

「フン、アンタのお陰で、今日から私の職場が伊東研究所になった
のよ。それにしても、すっかり畏に嵌ったわね、バ怪人さん」

「ほう、なるほど、それでは今日からあんたとも敵同志ってわけだ。
それなら遠慮はいらねえ。よくもこのオレを嵌めてくれたな。これ
でも食らえ」

そういうと、茶色い怪物は口から大量の白い泡を吐いた。慌ててよ
ける美香とアクアドール。

二人の目の前では泡を被った木製のベンチがあつという間に、ドロ
ドロと溶けていく。

「な、なんてことすんのよつ。明日からお爺さんたちの座る場所が
なくなるでしょーが」

「おいっ、ちよつとは怖がったらどうなんだ？　オレのせつかくの
技が台無しだろーが。それからお婆さんたちが困ることも忘れんな
ー」

「わかってんなら、最初からすんなー」

だが、怪人はどんどん辺りに白い泡を振りまいて、公園の遊具を壊
していく。

滑り台。

ブランコ。

アスレチックジム。

美香とアクアドールはそうやってじりじりと公園の端へ端へと追い
詰められていった。

「このままじゃ。私たち殺られちゃうわ」

美香がそう呟いたとき、アクアドールが独りでにしゃべりはじめた。

《良かったら僕が囃になりますよー。ほおほお……》

「アクアドール……」

《ほおほお……》

「でも、だめよ」

《ほお……？》

「あなたは伊東博士が永い歳月をかけて作り上げた命の結晶でしょう？ 私も同じ科学者のはしくれとして、その大事な作品をおいそれと壊すわけにはいかないわ」

すると、美香の言葉を理解したかのようにアクアドールは首を横に振った。

《それなら大丈夫ですよ。僕は死なないんでー。ほおお》

なんなのだろう。この自信は？ 出会った時から謎の多い生物だったが、美香はいつのまにか伊東博士の作ったこのアクアドールというものの可能性にかけてみたくなっていた。

「ほんとに任せて大丈夫なの？」

《はい、大丈夫です。ほおおお》

「死なないでね」

《ほお》

そういうと、アクアドールはすると敵に向かって歩き始めた。

「ヒャッヒャッヒャッ。でくのぼうが何をしに来おった？」

《僕がこの街を守る。ほおおおおお》

「ふん、正義の味方が奇妙な息遣いをしおって、どっちが怪人かわからんではないか。まあよい。この街ともどもお前を消し去ってくれるわ」

そういつて、怪人は再び口から白い泡を吐き出した。

だが、アクアドールは高速の動きで、怪人の攻撃を紙一重のところであわしていく。

「す、すごい。なんて動きなの？ あんなにだるい喋り方してるのに、どーいうこと？」

美香は茂みの中から静かにアクアドールの動きを見守っていたのだが、いつのまにか興奮して表へと飛び出していた。

「ぬう、こしゃくな。それではコレならどうだ？」

怪人は頭の角度を下げて、触角をとばした。佐藤博士を殺した恐怖の刃だ。

「だめっ、逃げてー。」
ぐしゅっ。

だが、アクアドールは体の中心を貫かれてもケロっとしている。
《そんなことしても無駄っすよ、僕は無敵なんで。ほおおお……。》
そういうと、次の瞬間、アクアドールは全身を急激に沸騰させて体をオレンジ色に変え、そのエネルギーを口から大きな火炎に変えてはきだした。

《アクアフレイムうー、ほおおおおお。》

「な、何っ？」

紅蓮の炎が一瞬で怪人の体を包んだ。

「う、うおおおお。体がやける」

怪人は火だるまになってその場で転がった。

「やったわ。アクアドール」

だが、美香の喜びもつかの間、今度はアクアドールの様子がおかしい。

全身から真っ白な湯気を出してしぼんでいく。

「こ、これは何？　どういうこと？」

《この技はめっちゃ体がだるいんすわー。ほおおおお》

アクアドールは両手で頭を抱えたまま、あたりをふらふらし始めた。
「そうか、アクアドールの主成分は水。おそらくさっきの炎と体温の上昇で体の大部分が蒸発し始めているんだわ」

だが、そういつている間にもアクアドールはみるうちに縮んでいく。一分後にはほぼ半分の大きさになっていた。

「大変、このままじゃ、完全にアクアドールが消滅しちゃうわ」

美香はあわてて薄暗い公園の中で水道を探したが、どこにもそれらしいものは見当たらない。

「いったいどうすればいいの？」

一方で、怪人は自分の真上に泡を吹き上げると、その泡に含まれる水滴で、一気に自分の火を消しさってしまった。

「ぬ、ぬうう、わしとしたことが油断したわ。この水人形め、もは

や生かしては帰さん。覚悟しろ」

そういつて怪人が再び泡を吐こうとした瞬間、倒れかけていたアクアドールの体が激しく光りを放った。

「うっ、なんだこれは？ 眩しい」

《アクアフラッシュー、ほおおおおお》

辺り一面が、雷を乱反射したように点滅する。

《今です。ご主人さま、はやく逃げてください。ほおおおおお》
だが、近くにいた美香も同じように目をやられていた。

「ちよつとー、なによコレ。眩しくてなにも見えないわ」

そんな美香を尻目に、状況判断に長けたアクアドールはその場からただ一人逃げ出していた。

《残念です。どうかお元気で。ほおおおおお……》
「……っつー」

五分後。

アクアフラッシュの効果が薄れ、ぼんやりと辺りが見え始めた美香の視界には、自分の首に突き付けられた鋭く光る茶色い刃が映っていた。

「お目覚めですか、お嬢さん？」

「……ええ、とっても」

美香は怪人に首ねっこをつかまれると、そのままアジトへと連れていかれた。

ドサッ。

「きゃっ」

アジトに着くと、美香の体は小荷物のように狭い空間に放り込まれた。

「ここで大人しくしてろ」

そういうと、怪人は目の前の鉄格子に鍵をかけてしまった。

「ちよつと、何すんのよ」

美香が格子を握りしめガチャガチャと揺らす。

「あんたに恨みはないが、伊東研究所には恨みがあつてなー。その餌となつてもらうのさ」

「私を人質にする気？ 無駄よ。彼は来ないわ。私とは何の関係もないもの」

美香はそつぽを向いて怪人から目をそらした。

「ヒヤッヒヤッヒヤッ。威勢のいいお嬢さんだ。だが、所詮奴も人の子。一人の人命を前にして見て見ぬふりはできんよ」

「さあね、分かってないのはどちらかしら？ こんなことしても恥をかくのはあなたの方よ」

「ふん。そんな時はそんな時よ。ワシがお前を茶色く輝くゴキブリの怪人に改造してやるわ」

その瞬間、美香の顔が急に青ざめた。

「ええつ、そんなのいやよっ」

「いまさら命乞いか。見苦しいぞ。我らに楯突くものは……」

「どうせなら『蝶』にして」

「え、そういう問題っ？」

「うん。駄目っ？ ダメなら、蛾でもいいけど……。どうせだったら、私、空飛びたいし」

「何それっ？ もうーだから学者は嫌いなんだ」

その直後、極度の沈黙が美香と怪人を襲った。

ぴちゃっ。ぴちゃっ。ぴちゃっ。

天井から突き出た鼠色のパイプを伝つて雫が落ちてくる。

美香は牢屋の隅で体育座りをしながら、ぼんやりとその様子を眺めていた。

「あー、もう耐えられないわ。これじゃ囚人じゃない」

だが、壁は一面が分厚い鼠色のアスファルトで覆われており、鉄格子も全体が茶色く錆びているとはいえ、女性一人の力でどうにかできるものではない。

「どうすんのよ、コレ？ 学校は？ それどころかお風呂にも入れないじゃない」

美香はうんざりして両手を枕に仰向けに寝転んでしまった。

だがそのとき、聞きなれた声が、壁から突き出したパイプの中から聞こえてきた。

「あーテストテスト。おーい、美香君？ そこにいるのか？」

恭介の声だ。

「恭介君？ ええ、私はここよ。あなたこそどうしてここがわかったの？」

「それはオレが天才だ……」

「もう分かったわ。とにかく私は中にある小さな牢屋に閉じ込められているの。早く助けてよ。」

「ハッハッハッ、そんなことオレには無理だよ」

姿こそ見えないが、パイプを通して声を聞いただけで恭介のあきれた顔が浮かんでくるようだ。

「ちよつと、ソレどういうことよ。誰のためにこんな目にあってると思ってるの？」

「そんなに怒るなよ。『オレには無理だ』と言っただけだろ？」

「それじゃあ、一体だれが……？」

その時、美香は、パイプを通して落ちてきた雫が、そばで一体の人形になっていることに気づいた。

「あ、あなたは……アクアドール」

アクアドールはその場でむくつとおきあがると、すっかり元の大きさに戻っていた。

《ご主人さま。お迎えにあがりました。ほおおおお》

「迎えに上がったっていうか、さっき明らかに私をほったらかして

逃げたよね？」

《これですね、問題の鍵は？ ほおおお》

「コラッ、人の話を最後まで聞けっ」

アクアドールはすぐさま鉄格子の鍵の部分に自分の手をあてると、全身を真っ赤に発光させた。

すると次の瞬間、南京錠は火花を散らせてその場で焼け落ちた。

ヴァンソン、シューーー。

「一体どーいう仕組みなわけ？」

美香はパイプを通して、外にいる恭介に尋ねた。

「なんかホラ、アクアドールの中にある水素分子みたいなやつが、空気中の凄い物質とくっついて爆発したんだよ」

「なによその適当な説明は？ あんたホントに科学者なの？」

「仕方がないだろう。研究中の液体に食べかけのプリン落としたら、こいつが出来たんだから」

「なにそれ？ どんだけ凄い偶然なの？」

だが、美香と恭介が雑談している間に、爆発音に気づいたアジトの戦闘員が牢屋のそばへ駆けつけてきた。

「なんだ今の音はー？ ブラブラブラ」

「どうやら、オレたちに話してる時間はなさそうだ。脱出できたら、近くの公園で落ち合おう。あとこれを頼む」

パイプの中からコロンという音がすると、サララッパを巻いた緑色の石が転がり落ちてきた。

「これは何？」

「それは特定空間内の空気を吸いとって爆発する特殊な石だ」

美香はその石を手にとると、その石が持つ不思議な魅力に見とれていた。

「これもあなたが作ったの？ すごいじゃない？」

「いや、君の研究所のテーブルに落ちていたものだ」

「盗んだんかいっ？」

「違う、落ちていたんだ。とにかく細かいことはあとだ。それをで

きるだけアジトの中枢部分に仕掛けてくれ。うまくいけばアジトもろとも奴らすべてを壊滅できる」

「全然細かくないんだけど……。ま、いいわ。やってみる」

そういうと、美香とアクアドールは隊員たちの足音がする廊下へと走っていった。

廊下には銀色のタイツをはいた10人の戦闘員がいる。

「なんだお前は？ ブラブラブラ」

「もう面倒だわ。アクアドール、みんなまとめてやっちゃって」

アクアドールは美香のGOサインに大きく首を縦にふると、大きな拳を振るい始めた。

隊員たちの体はパチンコ玉のように壁にぶち当たると、部屋中を弾け飛んでいく。

「いいわ。その調子よ。そこっ、ストレート」

気づくと美香は、アクアドールのそばでシャドーボクシングを始めていた。

だがその時、近くの部屋からさらなる新手がやってきた。

「もーこれじゃキリがないわね。よし、アクアドール、敵をうまく交わしながら敵のやってくる方向に向って私を連れてって頂戴」

《ほおおお》

アクアドールは前傾姿勢をとると、アメフトのセンターフォワードのように強烈なタックルで向かってくる敵をなぎ倒して奥へ奥へと切りこんでいく。

そして、二人はようやく最下層へとたどりついた。

部屋の中は司令室となっていて、たくさんのモニターとスイッチが理路整然と配置されており、モニターのいくつかは実際に地上の状況を克明に映し出していた。

「ここがどうやらアジトの心臓部みたいね」

そういうと、美香は懷から先ほどの石を取り出すと、天井の光を当てながら成分分析を始めた。

「リユフォンが3グラム、サイオンが8グラム、デリスが20グラ

ム、あとは炭素が40といったところね。外側のラップを外してから52秒が限界ってところかしら？ アクアドール、私を背負って一番上の階まで50秒で行けるかな？」

《わかりませんがやるだけやってみます。ほおおお》

「間に合わなければドカンよ。ここのアジトぐらいはきれいに吹き飛ばぐらいの量があるわ。」

《わかりました。いつてみせます。ほおおお》

「そうこなくっちゃ。それじゃいくわよ。よい……ドンッー」

美香の手からラップをはがされむき出しになった石が地面に転がり落ちると、アクアドールの俊足が狭い空間を光のような速さで突き抜けていく。

それは1分間にもみたくないわずかな時間だったが、驚異的なスピードで流れていく景色が時間の秩序をゆがめると、より鮮明な景色を美香の脳裏に焼きつけるのであった。

そうやって美香とアクアドールはあつという間に最上階までたどり着くと、最後のドアを発見した。

「街灯が見えるわ、あれがおそらく最後のドアよ」

《ほおおおおおお》

アクアドールは背中に美香をのせたまま、一気にそのドアを突き破った。

パリンッー！！

「やるわね、50秒ジャストよ」

その瞬間、ドアを破り滞空状態に入った二人の背後で、大きな火柱が上がった。

ドオオオオオーンンン。

一瞬の閃光の後に、激しく鳴り響く大地。

少し遅れて起きた津波のような爆風が二人の間を吹き抜けると、美香とアクアドールはその風に煽られ、10メートル先まで吹き飛ばされてしまった。

数分後、美香はうつ伏せのまま頬杖をついて、燃え上がる敵のアジトを眺めていた。

「なんでだろー？ サイオンが10グラムだったのかなー」

美香の鼻の頭と頬には墨でかいたような汚れが付いている。

そしてそのそばではアクアドールが泥まみれになって立っていた。どうやら、爆風の盾となり美香を守っていたようだ。

「でも、あの怪人はどこにいるのかしら？ 基地の中にはいなかったわよねー？」

《はい、どこにもいませんでした。どこかに出かけていたんすかねー。ほおお……》

「ヒヤッヒヤッヒヤッ、ご名答だよ」

気づくとすぐそばには、茶色い兜の怪人が立っていた。

「よくもやってくれたねー、本当によくやってくれたよ。せつかわしが隊員たちをねぎらうために近所のコンビニまでアイスを買いにいったのに、すべて台無しじゃねえかー？」

怪人の言うとおり、手には白いビニール袋がぶら下がっている。

「やっぱし生きていたのね。ていうか、なんて人間くさいの？ しかも何か微妙にパシられてるし……」

「違うわー、みんなが『ゴリゴリ君が食べたい』ていうから公平にジャンケンで決めたんだ」

「ふーん、そりゃ負けるわよねー。あんたの手、グーしかだせないもんねー。」

美香にバカにされると、怪人は丸い団子のような手を慌てて後ろに隠した。

「うるせー、とにかく覚悟しろ。このカブトーシンが貴様らを成敗してくれるわ」

「ようやく名前言ったわね、あんたが中々名乗らないから作者は大変だったのよ。あんたが出てくる度に、いちいち『茶色い甲羅の怪人が……』っていわなくちゃ駄目だったんだから、ちよっとは反省

しなさい」

「とにかくだつ、ブラックスターズに齒向かう者に容赦はせん。死をもって償ってもらうぞ。」

「死の制裁を受けるのはお前らのほうだ」

その時、どこかで聞き覚えのある声がした。声の方を向くと、近くのプロック塀の上に白い研究服をきた20歳ぐらいの青年がポーズを決めて立っていた。

「オレの研究を邪魔するやつは誰であろうと許しはしないぜ」

「お、お前は伊東恭介。なぜここに？」

「フツ、オレのことを知ってくれているとは光栄なことだが、ちょっとばかしおイタが過ぎたようだぜ。オレは貴様らの悪事を絶対に許さない」

恭介の一言が珍しく決まった……かに見えたのだが。

「おいっ、何言つてんだ。それはこっちのセリフだ。お前らの勝手な研究でオレたちの惑星を破壊しやがつて」

「それは一体なんのことだ？」

「とぼけるな、10年前、お前んとこで作った人工衛星がブラックスター星と正面衝突して、大爆発しただろうが」

恭介の頭の中に10年前の新聞記事がはつきり映像となつて浮かび、ビクリマークが三つきれいに並んだ。

「ああーあれかー。伊テライトだろう。だが、オレを恨むのは筋違いだ。なぜならあれを設計したのは親父だからな。オレはあの衛星に小型ミサイルを三千発搭載しただけだ」

「それが余計だつてんだろーが。なんで人工衛星にミサイル積んでんだよ、意味わかんねーよ」

「うるせー、ミサイルは男のロマンだ。とにかくオレの秘密を知った以上、生かしてはおけん。ここできたばるがよい。いけー、アクアードールと北野美香一号」

その時、美香の強烈な飛び蹴りが恭介のベンケイにさく裂した。

「誰が一号じゃー。ボケー」

バチンッ。

ドサッ。

塀から地面へと転がり落ちて、自分の足を押さえながらもがき苦しむ恭介。

「痛っ、痛ーよ。めっちゃ痛い。もう何すんの？」

「人をロボットみたいに言うな、しかも『身におぼえない』って言いながら思いつきし関わってんじゃないの？ どちらかっていうとお前の方が悪魔じゃー」

「ふん、若気の至りというやつよ」

恭介は埃をはらうと再びかっこつけて見せたが、美香の見る目は完全に軽蔑に変わっている。

「当時10歳位だから、確かに若かったんだろうけどさ。ここは謝った方がいいんじゃない？」

「フンッ、オレは昔から、謝られるのは好きだが、謝るのは嫌いなんだ」

「この人、性格最低なんですけど。ていうかあんたは子供かー」その時、会話に集中している二人に正面からカブトーシンが突っ込んできた。

「いまこそ、復讐の時じゃ。死ね、カブトブレード」

カブトーシンは触角を触ると、角はきれいに外れて一本の剣となった。

そしてその剣を握りしめると、射程圏に入った二人に切りかかる。

ブンッ

刀が風を切る音が聞こえる。

二人はうまくしゃがみこんで避けたつもりでいたが、真後ろにあった木にゆっくりと切れ目が入り、美香の方に倒れてくる。

ドシーン。

崩れ落ちる大木。

辺り一帯に舞う砂煙。

「あっ……」

間一髪で避けたものの、埃が目に入りその場で立ち止まる美香。そこにさらに切りかかるカブトシン。

「とどめだっ」

「いやっ、止めて」

頭上に振りかざした刃のシルエットが美香の影に重なった。
ブシュツ。

「嫌　　っ」

だが、次の瞬間、鋭い刃は絹よりも柔らかい繊維で覆われ、咽元数センチのところで防がれた。

そう、アクアドールの体が盾となって食い止めていたのだ

「ぬう……、またお前か……」

《危なかったすわー、ほおおお》

「アクアドールッ」

ゆっくりと視界が戻った美香に大きなため息がこぼれる。

《どうでしょう？ ご主人さま。ほおおお》

「はあはあ……、そうね、本当のところ、事情を聞いたら許してあげたくなっただけ、お互い分かり合えそうもないものね」

美香がアクアドールを間に挟んで殺気漲るカブトシンを見た。

目の前では一メートルほどの大きな剣が、両者の腕力のぶつかり合いで小さく震えている。

「……悔しいけど戦うしかないみたいね」

《了解です。ほおおお》

アクアドールは握りしめていたカブトシンの剣を振り払うと、再び3メートルの間合いをとって睨みあった。

「ハアハア……、狂おしいほどタフなやつだ。どうだウチで働かんか？」

《ほおほ》

アクアドールは首を横に小さく一回振った。

「そんな返事じゃ、わかんねーよ」

そういつて再びカブトシンが切りかかる。だがそれをアクアドー

ルが左手で受け止める。

カキーン。

「なんだこの硬さは？」

その瞬間、右方向から、水色の鋭い刃が飛んでくる。

《アクアブレード。ほおおおおおお》

カブトーシンの頭の兜が真つ二つに割れ、大きく体のラインが曲がる。

「うおおおお、ワシの兜が……」

「今だ、アクアドール。アレを出せ」

恭介の一言にアクアドールは小さくうなずくと、体から無数の水滴をカブトーシンに向けて発射した。

《アクアマシンガン。ほおおおおおおおおおお》

「うおおおおー」

水滴はダイヤのように鋭く光りながら、対象物にぶつかり激しく火花を散らして弾けていく。

カブトーシンの甲羅は無残に砕け散り、生身の体をむき出しにする
と白い泡を吐いてその場に倒れた。

「凄いわ、なんて破壊力なの。あの分厚い甲羅をあんなに簡単にぶち破るなんて……」

そういつて関心する美香に恭介が得意げに解説をする。

「当たり前だろう。水の刃は鉄よりも鋭くて強暴なんだ。水压をあげればダイヤモンドでさえ砕けるさ」

「アンタは何もしてないけどね……」

一方、砂にまみれて倒れていたカブトーシンは、天に向かって助けを求めている。

「黒星王様^{くろせいおう}！。ど、どうか我にもう一度チャンスを……、もう一度力をー」

すると次の瞬間、辺り一面に真つ赤な雲がたなびき、低く冷たい声
が大地に響き渡った。

「カブトーシンよ、ブラックスターズにおいて敗北が何を意味する

のかわかっておるうな？」

「はい、分かっております。ですが……。」

「うむ、よい返事だ。ならば身をもって償うがよい」

「ど、どうか今回ばかりはご慈悲を……。うおーっ」

ビシッバチンッ！！

薄い雲の隙間から急に現われた大きな雷に打たれると、カブト・シンは大きく痙攣したあとその場に倒れ、キャラメル色の頑丈なボディは真っ白な炭へと変わった。

「それから伊東恭介といったな、この借りは近いうちに必ず返させてもらうぞ。せいぜい首を洗って待っているんだな。ハアーツハツハツハツ……。あ、ちよつと君ー、もうマイク切つていいよ。電源落としてくれる？ うん、その右端のボタン。それぞれ。ピー、ガチャン、ゴトン」

それだけ言つと、赤い雲はどこかへと消えていった。

そして、黒星王を目の当たりにした恭介は額から大きな汗を流している。

「黒星王め、ついに動き出したか。それにしてもなんて奴だ。信じられない。簡単に仲間を殺してしまうなんて。やはりブラックスターズは悪魔の軍団だ」

「ちよつと、なにこの状況を利用して善人面してんのよ？ 状況は多少変わったけど、あなたの犯した罪は永久に消えないわよ」

「よし、研究所に帰って早速研究の続きだ。それではいくぞ、アクアドール、一号」

「人の話聞きなさいよ。それから一号って何？ もはや名前さえも呼んでくれないわけ？」

必死で恭介に食らいつく美香のそばをアクアドールが横ぎっていく。

「あ、アクアドール」

美香の呼びかけにアクアドールはゆっくりと振り向く。

「今の技、凄かったわねー。アクアブレイドにアクアマシンガンだっけ？ どうして最初の戦いで出さなかったの？」

《美香さん、あんまり細かいことにこだわっていると友達なくしますよ。ほおおおお》

アクアドールは美香をちらつとみると、そのまま歩き始めた。

「あー、さてはあんた自分の技忘れてたわねー。ちよっと人の話聞いているー？ 待ちなさいよ、どこまで勝手なのよ、あんたたちはー」
そうやって仲良く笑う三人の影がゆつくりと白い街灯のそばを流れていく。そして、その傍では、カブトーシンの体が真っ白な灰となつて妖しく風にさらわれていった。

第二話 友情の代償

ゆらゆらとオレンジ色の炎が辺りを照らす。

頭上では、プラネタリウムのように満天の星空が輝き、石でできた円形のステージを扇形の観客席が取り囲んでいる。

どうやらここはどこかの国の祭壇のようだ。

そしてステージの中央では、頭から全身にかけて黒い布を被った一人の青年が、数万人の観客たちを相手に儀式を進めていた。

その傍には、土嚢を積んだ台座の柱にくくりつけられたセーラー服姿の一人の少女がいる。

「目覚めよ、禍々しき魂。ミュージックスタート」

男の掛け声に合わせて、会場にいた、むさい男たち全員によるアカペラ合唱が始まる。

「伊東研究所は世界ツーー、どこがー凄いかわからんがー、とにかくなんかで世界ー」

ノイズにも似たその曲は、会場中に響き渡ると、やがて自分たちへの称賛の拍手へと変わっていた。

パチパチパチパチパチ。

天ぶらを揚げたような音が会場を揺らす。

その音に反応してか、少女がゆっくりと目を覚ます。

「う……うーん？ え、何ここ？」

少女は最初は寝ぼけている風だったが、やがて目の前の異様な光景にはっと息をのむ。

いつもとは違う西洋の風景、手足にくくりつけられた硬いロープ。目の前にいる大群衆。自分を取り囲むたくさんの炎のやぐら……。すべてが彼女の知っている世界とは異なっていた。

そこに先ほどの男がやってくる。

「目覚められたか？ 旅の者よ」

少女は目を大きく見開いて、男の顔を凝視した。

「きよ、恭介君？」

だが黒い布を被った男は、静かに首を横に振る。

「恭介ではないっ、イトンティーナ・バランティー・キヨスケだ」

「イトンティーナ・バランティー・キヨスケ？ 何言ってるのよ？

どこから見たって恭介君じゃない？」

だが、男は眉間にしわを寄せて怒りをあらわにする。

「無礼者、一体、誰に口をきいているのだ？ 断じて、私は恭介などではない。ウエスタン・バラナ・キヨスケだ」

「さつきとだいぶ名前変わってますけど……、ていうかどっちでもいいから、早くここから降ろしてよ」

「小娘がなにをぬかしておる。これは聖なる儀式ぞ」

「なにが聖なる儀式よ？ いったい何をするつもり？」

「縄できつく縛ったあと、電流を流すのじゃ」

「ちよつとまつてよ、なんの嫌がらせ？」

だが、男はニマツと笑顔を見せて続けた。

「これは実験なんだよ。こうすることで、ローストビーフのベストな調理時間が分かるんだ」

「なにそれっ？ いやよ、そんなことのために死にたくない」

台座の上で激しく暴れる少女。

「大丈夫だって、痛くしないから。1億ボルトから始めるし……」

「いきなり死んじゃうじゃない」

少女は両目を閉じて大声で叫ぶが、男はそんな無抵抗な少女に襲いかかった。

「いいから、おとなしくしないかつ」

「何すんのよー、変態っ」

だが次の瞬間、何かの拍子に少女のロープは解け、少女の足が男に命中する。

ゴキッ。

ガバツ。

払いのけた布団に効果音がつくぐらいの勢いで、美香はとっさにベッドから飛び起きた。

上半身だけを起こした状態で、ぼんやりと視界が開けていく、そしてやがて、自分の目がゆつくりと暗さにも慣れていく。

「何だ、夢かつ」

最初に目に入ったのは、壁に掛けていたかわいらしいキャラクターのついた真っ赤な掛け時計だ。

時間は丁度、夜中の二時半。

なんでこんな時間に起きてしまったんだろうと頭を抱える。

そこから、ゆつくりと視点は右に移動する。

美香の腰ぐらいの高さに窓があり、白いレースのカーテンがかかっている。

そしてそのそばには美香の勉強机がある。

さらに視点をおとすと、部屋中に敷き詰めたピンク色のカーペットが見えた。

もう夏だし、いい加減カーペットもしまわなければ……。

カーペットの上では大好きなクマのぬいぐるみが緑のクッションを枕にして寝ころんでいた。いつもとなんら変わらない。

美香はその光景をみるとほっと息をついた。

「夢でよかったー」

汗だくのパジャマが気持ち悪かったが、それが眠気を拒むほどの綺麗好きではない。

もう一度、美香は布団をかぶって寝ようと思つて体勢を変えた。

だが、下半身に違和感を覚えた。

「あれっ、足に何か絡まつてる？」

掛け布団をめぐつてよく見ると、美香の足はロープでグルグル巻きにされていた。

「なにこれ？」

するとそのとき、美香の耳元で聞きなれた声がした。

「やっと目が覚めたか？ 美香くん」

そこには、伊東恭介が、赤くなった顔面をさすりながらそこにたっていた。

恭介の顔面には前回と同じく美香の小さな足型がついていた。

どうやら寝ているうち美香のケリを食らったらしい。

「きゃーっ、何？ いやっ、やめてよ」

美香の枕元にあったものが順番にとんでくる。

枕に、植木鉢に、読みかけの本に、電気スタンド……。

恭介はそれらをひよいひよいとよけながら、話を続けた。

「誤解だ、誤解。なにもオレは君にいかかわしいことをするために、こんな夜中に会いに来たわけではない」

「じゃあ、一体なにしにきたのよ、このド変態」

「決まってるじゃないか、君が寝ているうちに、家から運び出して実験の材料にするためさ」

「十分いかかわしいわっ」

次の瞬間、美香が最後に投げた目覚まし時計が恭介の顔面に命中した。

ガチャンッ。

「うっ」

その場に崩れ落ちる恭介。

30分後、灯りをつけた部屋の中で二人はこそこそとしゃべっていた。

「もういい加減にしてよね？ 明日は学校なんだから……」

美香が運んできたお盆の上にはコーヒーの入ったカップが二つ並んでいる。もちろん、みんなが寝ているのを確認して美香が台所から調達してきたものだ。

「大丈夫だ、オレは20歳だが、専門学校にすらっていない」

「なにがどう大丈夫なのっ？ ていうかなんの自慢っ？」

恭介はかるくコーヒーをすすると話を続けた。

「とにかくだ、美香君の睡眠を妨げたことは謝ろう。すまなかった」
恭介は深々とその場で頭を下げた。

それをみて、呆れながらも小さく首を横に振る美香。

「いや、分かってくれたらそれでいいのよ、わたしも寝ぼけていた
とはいえ、あなたに色々酷いことしちゃったみたいだし、これでお
あいこつてことにしときましょ」

だが、恭介はさらに深く頭を下げる。

「いやーほんとにすまなかった。今度は気付かれないようにヤルか
ら」

「ちよつとー？ 反省の仕方が違うんだけど……。第一、あなた、
どうやって私の部屋にしのびこんだのよ？ ちゃんと戸閉まりもし
たのに」

「なーに科学者のオレに作れないものなどないのさ」

そういつて恭介は。美香の家の鍵に似せて作った模造品を目の前に
ちらつかせた。

銀色のボディがキラーンと怪しく光る。

「なんか職業変わってるんですけどー？ ドロボウですかっ？」

美香はほとほと呆れはてて、目頭を押さえる。

「ていうか、だいたい今度はなんの実験なの？」

恭介はカップに残っていたコーヒーを飲み干すと、得意げに話す。

「なーに簡単な実験だ。君をロープでグルグルに縛りあげてだな、
全身に電流を流すんだ。」

「夢の中と同じ実験をすんなー」

だが、恭介はケロッとした顔をして話を続ける。

「いいじゃないか、寝てる時間がもつたないだろう？ 実験が終
われば傷をつけずに帰すつもりだったし」

「当たり前でしょっ。っーか何のいいわけよ？ まったく油断も隙も
ないわね？」

「まったくだ」

「あんたのことよっ」

美香は声を荒げて叫ぶ。

「いい？ 本当なら、これは犯罪なのよ」

だが、恭介はゆっくり首を横に振る。

「大丈夫だ。オレの辞書に『犯罪』の文字はない」

「今すぐ書き足しなさいっ」

美香はこっそりと玄関から恭介を送り出すと、そのまま眠りに落ちた。

その日の午後、美香は伊東研究所にいた。

地下の研究所では白衣を着た恭介が、作業台に並ぶ三本のフラスコを相手に必死で格闘している。

一体、何をつくっているのだろうか？

紫の液体がコポコポと大きな音を立てている。

「もう、あんたのせいで、今日、学校遅刻したんだけど？」

「はて？ なんのことかな？」

実験をつづけながら、ちらりと美香の方をみる恭介。

そしてすぐに手元に視線をもどした。

視線の先では、スポットで吸引された赤い液体が、シャーレー（皿）の中でゆっくりと広がっていく。

「だからー、あんたがあんな時間に人の家に忍び込むから、ちっとも眠れなかったっていったんのっ」

「若いうちはよくあることだ。気にするな」

恭介は、美香のつぶらな瞳にむかってウインクをした。

「よくあつてたまるモンですかっ。ていうか、何そのウインク？

かなりむかつくんだけど……」

だが、次の瞬間、美香は小さく息をのむと、急に神妙な面持ちにな

った。

「それに……、それによつ、私、佐藤博士と約束したんだから……。実験を続ける代わりに、ちゃんと学校に行くつて。中学では一日休んじゃったけど、高校では絶対、無遅刻無欠席で頑張るつて」

目に涙を溜めて、カバンについたキーホルダーを握りしめる美香。それにしれつと恭介が答える。

「記録は破られるためにあるんだ」

「青春ドキュメンタリーかつ？　そういう話をしとるんじゃないわつ」

美香は怒り狂つて、高校指定の紺色のカバンをブンブンと振り回す。それをさらりとかわす恭介。

再び距離をとつて、テーブル越しに睨みあふ二人。

やがて、恭介は手に持っていた実験器具を作業台の上に置くと、ゆつくりと口を開く。

「なるほど、大体の話はわかった」

「大体つてなによ？　大体つて。私は」

「だが、親しい仲とはいえ、なんでもかんでも人のせいにするのは感心しないな」

「どー考えても、あんたのせいでしょうが？」

美香の言うとおり100パーセント恭介の過失だったが、大きく咳払いをして誤魔化す。

「美香君、こんな言葉を聞いたことがあるか？　『他人は自分自身を写す鏡だ』と」

「……あるけど」

突然の話の展開に、戸惑いながらも美香は小さくうなづく。

「そう、例えば、いま目の前にある環境が最悪な状況だったとしてよ。だがそこで『アレがダメ』、『コレがダメ』と文句をつけているうちは、何も始まらないんだ。相手を通して映る自分の姿を冷静に見つめ、その上で自分が変わっていかなければ周囲はなにも応えてくれないのさ。かくいうオレも、昔、裏の畑に住む爺さんによく

怒られていたんだがな。『お前自身が変わらなくてはダメだ』てな。結局、その爺さんは昨日、近くのスーパーで万引きで捕まっていた。そう彼は変わってしまったんだ。なんてこった……」

急に両手で頭を抱える恭介。

「なにを伝えたいのかまったく見えてこないんだけど？」

だが一度途切れた緊張の糸を、恭介の真面目な表情がきつく結んだ。
「君に見せたいものがある」

「えっ なによ？……」

返事を渋っていた美香だったが、二人の間にたなびく沈黙に耐えかねて、やがて小さく頷いた。

「……もう、わかったわよ。見ればいいんでしょ、見ればっ」

「こつちだ」

恭介が案内した研究所の壁面には、高さ1・5メートル幅3メートルのホワイトボードが真つ白な周囲の壁に埋め込まれる形で設置されていた。

「何これ？ ホワイトボードじゃない？」

「見た目はね。だが」

恭介は黒いペンを握ると、ホワイトボード全面に大きな字で『伊東恭介は大天才』と書き込んだ。

すると、次の瞬間、突然ホワイトボードが裏面と入れ替わる形で回転を始めた。

ギイイイイイイイイイ

サビついた音が周囲にけたたましく鳴り響く。

自分の耳を両手で押さえる美香。

「なに？ またからくりなの？」

恭介はそれをみながら満足そうにコクコクとうなずく。

一分後、ホワイトボードは回転を終えると、そこには緑色の大きな電子パネルが誕生していた。

縦横に無数の線が描かれ、その交差点には一定間隔で白丸が刻まれている。

美香は目を輝かせながら細い指でそのパネルに手を触れていた。どうやら科学者としての彼女の本能が刺激されたようだ。

「何かのリーダーみたいね」

「さすが美香君。察しがいい」

恭介が手を叩きながら、近くにやってくる。

「でも、こんな大きなリーダーで、何が分かるの？」

「ブラックスターズの怪人の居場所さ」

「怪人の居場所？」

「ああ、前回、カブトシンの体の一部分を失敬してきたんだが、たいへん面白いことがわかってな」

「面白いこと？」

「そう、奴らの体のなかには、人間が本来持つ構成分子の他に、ヘルクレインという紫色の鉱石が多く含まれていたんだ」

「ヘルクレイン？　どっかで聞いたことはあるけど、なんだっけ？」

美香の問いに恭介は大きく頷くと、そのまま話を続けた。

「君が知らなくても無理はない。ヘルクレインは本来、宇宙鉱石の一つで、地球上にはほとんど存在しない特殊化学物質なんだ。恐らく奴らはどこかの星を押さえていて、そこから手にいれているに違いない」

「へーそうなんだ。ていうか、初めて科学者らしいことを言ったよね？　ま、どっちでもいいけど……。で、この石にはどんな性質があるの？」

恭介は待つてましたとばかりに瞳を輝かせて、説明を続ける。

「ヘルクレインには、大きく分けて二つの特徴がある。その内の一つが、溶解能力だ」

「溶解能力？」

「ああ、生物の重要な構成成分であるタンパク質を一定時間溶かす力がある。やつらはこの性質を利用して、細胞の破壊・再生を繰り返す」

返し、新たな生物を生み出しているんだ」

「ふーん、でも、じゃあこのリーダーはなんで怪人に反応するの？」

「特徴は2つあるっていったら？ 磁力だよ磁力」

「磁力っ？」

「そうこの鉱石は、他の磁石にはない非常に特殊な磁力を持っているんだ。そして、当然、それを取り込んだ怪人にもその磁場は発生している、それを察知するのがこの機械というわけだ」

「へー、すごいじゃない。やるわね」

「ああ。研究に結構費やしたからね」

「それじゃあ、早速動かしてみましようよ、スイッチはどれ？」

「そこだよ、右下に緑のボタンがあるだろ？」

恭介の指示通り、大きなパネルの右端には大きな緑のボタンがある。美香は恐る恐るそのボタンを押した。

ポチっという音とともに、ボタンがへこみ、画面に大きな横筋のノイズが入る。

そして次の瞬間、画面にはエラーの表示とともに《アイムソーリー》の文字が浮かんだ。

美香の額から大粒の汗が流れる。

「何よコレは？」

けろっとした顔で恭介が答える。

「あーそれねー、昨日、掃除機をかけてたら、掃除機のパイプが当たって、潰れたんだ、というわけで……美香君、治してくれっ」

「んなもん知るかーっ」

バチコンッ。

美香の音速の蹴りが恭介のフトモモに命中して、恭介は泡を吐いてその場にうずくまる。

「痛ッ。な、何をするんだ美香君？」

「『見せたいものがある』って修理の依頼っ？ しかもどれだけモロイの？ この機械」

恭介はダメージを負った片足を庇いながらゆっくり立ち上がる。

「せ、精密機械だからー、仕方がない」

「精密にもほどがあるわ」

「ああ、そうなんだ。自分で作っておいてなんだが、なにをどうやって完成したのかさっぱりわからん。というわけで君の出番だ。まあ、オレはもともと液体専門だからな、それも当然といえば当然なんだが……」

「液体専門って何語？ まったく意味がわからないんだけど……」
そのとき、研究所のドアがコンコンと鳴った。

「恭介、入るぞ？」

ガラガラと扉があくと、そこには恭介が少し歳をとった感じの男が白衣を着て立っていた。

「父さん！」

「うそつ、この人が恭介君のお父さんっ？」

美香は大きな声をあげて驚いた。

背は恭介と同じぐらいだが、全身がこんがりとした小麦色の肌をしており、体の線もきりと引き締まっている。もちろん彼が科学者をやっていることは聞いていたが、目の前にいる彼を美香の想像する科学者の偶像と結びつけるにはあまりにもかけ離れていた。

「恭介、研究に没頭するのはいいが、実験がすんだらちゃんと片付けなさい。昨日もちらかったままだったぞ、まったくお前というやつは……」

低く重厚な声があたりにひびく。

これが大人の声というやつなのだろうか？

物凄くダンディーな声をしている。

「あー悪かったよ。それより父さん、この子が北野美香だ。ほらこないだ言ってた……」

「うん？」

ツーパーポイントの細長いレンズを通して、鷹のような鋭い眼が美香を視界に捉える。その場でたじろぐ美香。

「あー、君が例の実験台……いや、お友達か？」

「ちょっと待って……。いま『実験台』って言おうとしたでしょ？
なんて会話してんのアンタのこのウチは？」

そこですかさず恭介がフロアに入る。

「違うんだよ、伊東家では『お友達』を『実験台』と呼ぶことに決
めてるんだ」

「それでフロアしてるつもり？ 余計に怖いわっ」

だが、恭介親子は顔を見合わせると、にんまりと笑い合っている。
いつものことながら、呆れて言葉も出ない。

「いやーすまない。紹介が遅れたね。はじめまして、恭介の父親で
ここの管理をしている雄介といいます」

そういつて雄介はグローブのような大きな手を差し出した。

慌ててそれに応じる美香。

「こ、こちらこそ、初めまして、こちらの研究所でお世話になって
いる北野美香といいます」

美香が強張った表情を見せていたせいか、雄介は彼女を柔和な表情
で迎え入れた。

性格は、恭介とは違いジェントルマンなのかもしれない。

「構わないよ、楽にしてくれ。恭介からはいろいろ聞いているよ。
いつも面白い実験をしているんだってね？」

「はー。そう……ですね」

この男 つまり恭介が普段どんな風に自分のことを、父親に話して
いるのかわからなかったが、美香はとりあえず小さく返事をした。

「いまの段階で、得意分野とかはあるのかい？」

「まあ……、どちらかといえば機械工学の方ですかね？」

美香は前の研究所で作っていた『往復ビンタ目覚まし機』を思い出
しながら、そう答えた。

結局、人間の得意、不得意なんてその程度だ。

文章を読むのが嫌いなやつが『理系』と答え、計算の嫌いな奴が『
文系』と答えるのである。

だが、次の瞬間、雄介の目がギラリと光り、手に持っていた紙袋を

地面に落とす。

ガシャンツツツ 何かが割れる音がした。

「き、機械工学？ 君、機械に触れるのか？」

「えっ？ ええ、まあ……簡単なものなら、ですけど……」

雄介は両手で美香の肩を握りしめた。

「……よかった。本当によかった。ウチの家系は代々、液体系だから……」

その場で泣くむ雄介。

「だから何なの？ さっきから『液体系』とか『液体専門』とか……」

だが、すでに雄介の耳には美香の声は届いていなかった。

雄介は、先ほど地面に落とした紙袋を拾い上げると、中から大きな銀色の箱を取り出した。

「このDVDレコーダー直してくださいっ」

「あんたもかいっ？」

一時間後、銀色の作業台の上で、美香はDVDレコーダーと格闘していた。

「まったくなんなのよ？ 科学者の癖にこんなのも直せないの？」

美香は先ほどの緊張感など、とうに忘れてブックサと文句を言っている。

「すまん、昔から機械に疎くて、あ……、あと裏録とかつけてくれないか？」

「ちよつと、なに贅沢いつてんの？ もういい加減にしてよっ」

その声に便乗するように、恭介もあとに続く。

「そうだよ、父さん。あんまり無理をいっちゃ可哀想だ。オレもあとでこのCDラジカセをアイポッドに直してもらっただから……」

「お前の方が酷いわーっ」

美香の生拳が恭介のミゾオチを突く

「ぐおおっ」

恭介は両目が飛び出すような顔をしてその場に転げ落ちた。

「ていうか、さっきから何、好きなことばっかし言ってるの？ 科学者ならちよつとはこつちの方も勉強したらどうなんですか？」

美香の鋭い眼光にポリポリと頭を？く雄介。

「うーん……。それは気が向かん」

「なにそれ？ タメてまで言う言葉？」

「わかった、わかった。私もこれからはできるだけ努力しよう。ただ最後にひとつだけ願いをきいてはくれぬか？」

「なに？ あんまり期待はしてないけど……」

「なーに簡単なことだ、この28型テレビに羽根を……」
ガンツツツ。

数秒後、雄介はその28型テレビの下敷きになって、大空を飛んでいる夢を見ていた。

「ふう、これで最後ね」

美香はピンク色のアイロンのネジを締め終えると、作業台の上に戻した。

「ていうか、よくこれだけのモノを壊したわね？」

作業台の上にはカラーテレビから始まって、洗濯機、ラジオ、電子レンジ、オーブントースター、空気清浄機、アイロンなど数多くの家電が並べられていた。

『ああ、科学に犠牲はツキモノだからな』

雄介と恭介が声を揃えてうなづく。

「いばるなっ、褒めてないのよっ」

そのとき、突然、美香のケータイが鳴った。

「あっ、電話だ」

美香はケータイの着信を確認すると、通話ボタンを押した。

「もしもし、理沙？」

「美香っ、助けてー」

電話の向こうから聞こえたのは、美香と同じ高校に通う理沙の叫び声だった。

「どうしたの理沙？ 落ち着いて話して」

「……うん。さっき、帰り道で美香と別れた後、急に変な怪人に襲われて、そのまま連れ去られたの」

「か、怪人？」

「ええ、翼をもった怪物」

「翼を持った？ それで理沙はいまどこにいるの？」

「わからない。私、あまりのことで気を失っちゃって。気づいたら……。でもなんか鳥の巣みたい。藁がいっぱい敷いてある」

「他は？ 周りに何か見えない？」

「どこかの森みたい。ゴルフ場？ きゃーっ、ガーゴ、ガーゴ。バサバサバサバサ……」

「理沙っ？ お願い、返事して、理沙ッ」

だが、電話は無情にもそこで切れてしまった。

「おいっ、どうした？」

恭介が美香を気遣い駆け寄ってくる。

「友達が怪人にさらわれたって……」

「なんだって。」

力なくうなだれる美香。

「どうしよう、きつと私のせいだ」

「何をいつてるんだ。考えすぎだ」

「そんなことない。私が理沙と一緒にいなければ、理沙はブラックスターズにさらわれずに済んだのよ」

「とにかく落ち着けて」

そういつて必死に美香の肩を押さえつける恭介。だが、美香の興奮はいっっこうにおさまる気配を見せない。

「イヤッ、放してよ。もう決めたの。私、理沙を助けに行く」
パンッ。

そのとき、恭介が美香の頬をなぐった。

「いい加減にしろっ」

シヨックのあまり、頬をおさえて沈黙する美香。

「手がかりのない状態で騒いでどうする？ たとえどんな状況であろうと、じっくり作戦を練らなきゃだめだ」

だが、美香は恭介が思うより早く立ち直っていた。

「……たい」

「なんだ？」

「痛いわねっ、何すんのよー」

今度は美香が強烈なビンタを恭介にお見舞いする。
パンンンッ。

まるでアクションスターのように恭介の体が宙に浮いた
「痛えーっ。オレ、そんなに強く殴ったか？」

十分後、一応、仲直りした(?)二人は先ほどの怪人探知レーダーの前で、今後の作戦を話し合っていた。

「じゃあ本当にこれは信用できるのね？」

「ああ、液体系のオレを信用しろ」

だが美香の表情は曇ったままだ。

「全然説得力がないんだけど。ていうか、その『液体系』のあなたがどうして設計図もなしにこんなものが作れたわけ？」

「なに簡単なことだ。落ちていたものを拾っただけだ」

「拾ったってどこから？」

「隣の研究所だ」

さらに数分後、美香の足元には血まみれになった恭介が転がっていた。

表面の緑のパネルを外すと、中からは数千の部品が現れた。

「うわー、何コレ？ 配線がぐちゃぐちゃじゃない？」

「ああ、君の研究所の壁面と色んな線で繋がっていたからな、すべてカッターナイフで切り落としてやった」

「なにいばってんのよ？ それ科学者のすること？」

「前にもいっただろ？ 研究に犠牲はつきものだ」と

「何かを犠牲にするのは、何かを生み出してからにして欲しいわ」

美香はそう言うと、恭介が用意した工具を使って一つ一つ回路を修復していく。

10分後、額の汗を拭くと、美香が大きなため息をついた。

すでに美香の両手は手袋をはめていたにも関わらず機械の油でドロドロに汚れている。

「ふー、なんとか完成したわ。多分、コレで動くはずなんだけど……」

そういつて、美香がゆっくりとパネルを壁に戻すと、パネルに「ウエイクアップ」の文字が表示された。

「やったわ、恭介君、なんとか元に戻ったわよ」

それを聞いて、研究室の椅子でゆったりとくつろいでいた恭介が、テレビを消して重い腰をあげる。

「ようやく完成したか。くるしゅうないぞ」

「大層なご身分ね？ モノ壊すだけ壊しといて、テレビ見てればいいんだから」

「何を言うか？ ちゃんと反省はしているぞ。オレの場合、それが態度に表れないだけだ」

「大問題です」

そうついいながら、美香は自分の手をタオルで拭くと、パネルについている緑色のボタンを押した。画面上には周辺の地図といくつかの黄色い点が表示される。

「なるほど、この点滅している点が怪人の位置を示しているわけね」「その通りだ」

恭介は両手を組んだまま得意満面に答える。

「なんかむかつくんですけど、この人ッ」

だが、パネルに存在する点はすべて山麓に位置していた。

「でも、どうしよう。これじゃどれが理沙をさらった怪人か分からないわ」

「何か言ってなかったのか？」

「えっと、確か……近くにゴルフ場が見えるって言ってたわ」

「それから？」

「それから……、あっそうそう、鳥の怪人に捕まったって……」

「なるほど、よくわかった」

恭介はパネルを凝視すると、ある一つの点に注目した。

「こいつだ」

「えっ、何で分かるのよ？」

「移動速度だ。他の点をよく見てみる、断然、スピードが違うだろう？」

「そういわれば……」

美香はパネルを凝視した。

「でも、もし違ってたら……」

「それなら大丈夫だ。オレがここに残って待機しておこう。困ったらいつでも電話してきてくれ」

「わかったわ。……でも恭介君、まさかあなた、ここに残ってテレビを見たいだけじゃないでしょうね？」

「まさか、いくらオレでもそこまで人で無しじゃない」

そういつて慌てて新聞のテレビ欄を後ろにしまっ恭介。

そのとき、さっきまで席を外していた雄介が部屋に入ってきた。

「美香君、もう行くのか？」

小さく頷く美香。

「ええ」

それを見てさらに雄介が話を続ける。

「だったらウチのワゴン車を使ってくれ。歩きじゃ話にならないだろう？。」

「ワゴン車？」

「ああ、かなり古いが、軽く100キロは出るし。操作も簡単だ。そして何よりメーカー製だから、ウチの作品の中では一番安心だ」
そう言って自嘲気味に笑うと、雄介はピエロのようにおどけて見せた、

「えっ、でも大事な車なんじゃ……」

「別に構わんよ。美香君には、色々世話になったからな」

そういつて、雄介は二本の鍵がついたリングを美香に手渡した。

「あ、ありがとうございます。それじゃ私、行つて来ます」

美香はそう言い残すと、足早に部屋を出て行つた。

美香がエンジンをかけると、車は大きな唸り声をあげて振動を始める。そして美香がギアを替え、アクセルを踏んだ瞬間、車は猛烈な勢いでガレージから飛び出していった。

それを部屋の中から見送る雄介と恭介。

「でもホントによかつたのか？ 父さん」

「何がだ？」

「あの車だよ」

「心配ない。旧型だがエンジンは確かだ」

「いや、そうじゃなくて、あの車確かハンドルとブレーキが壊れてたんじゃない……」

「……」

「父さん？」

雄介はむんむんとした熱帯夜の中、ただ一人凍りついていた。

一方、そのころ、美香は理沙を救うために全速力で現場に向かっていた。

「もう固いわねー、何よこのハンドル。全然曲がないじゃない？」

夜の街を横にみながら、白いワゴンが角々と山を上っていく。

するとそのとき、車内の中央にある無線機に赤いランプが点り、ベルが鳴った。

ブルブルブル、ブルブルブル。

「何かしら」

美香は無線機のすぐそばにあるボタンを押すと、ベルの変わりに雄介の声が聞こえてきた。

「もしもし、美香君。聞こえるか？ 私だ、雄介だ」

美香が少々戸惑いながらもそれに応える。

「はいっ、聞こえます。一体どうしたんですか？」

「突然だが、君は何座だ？」

「はっ？」

「君の誕生日はいつかと聞いているんだ」

「7月16日ですけど……」

「うーん、なるほどな」

電話の向こうでは何やらペラペラとページをめくる音が聞こえてくる。

「何かなるほどなんですかつ？」

「それじゃー、次だ。血液型を教えてください」

「A型ですけど……」

「そうか……。なら大丈夫だ」

「だから、何が大丈夫なんですか？」

「いやな、君の今日の運勢を占っていたんだ」

その瞬間、強烈な頭痛に襲われる美香。

怒りが声になって現れる。

「この非常事態に一体何してるんですかつ？」

だが、雄介も一歩も退かない。

「非常事態だからこそだつ。ちゃんとワシの話を聞いてくれ」

「はいはい、聞きます聞きます。それでっ？ 私の運勢はどうだったんですか？」

小さな沈黙のあと、雄介がぽつりと答える。

「……最高だよ」

「えっ？」

「雑誌によると、今日の君はとてつもなくツイてるらしい」

その瞬間、美香の頬がやんわりと緩む。

「本当ですか？」

「ああ、何をしてもうまくいくと書いてある」

ゆつくりと笑顔を取り戻す美香。

だが、その無線のやりとりには続きがあった。

「そこでだ、世界一幸運な君にぜひ聞いてもらいたい話がある」

「なんですか？」

美香はにっこりとした表情で無線に耳を傾ける。

「実はな、その車、ハンドルとブレーキが壊れているんだ」

「へっ？　今、なんて？」

だが次の瞬間、美香の握っていたハンドルが中央で真っ二つに割れた。

バキンッ。

「きゃああああ、ハンドルが真っ二つにーーーー」

「そうなんだ。その車、以前にもハンドルが折れてなー、とりあえず接着剤でつけといたんだが、少しでも力を入れるとすぐにバキンとなるんだ。だから運転するときはくれぐれも注意してくれ」

「ちよっと待ってよーーーーー、何でそんな大事なこともっと早く言っといってくれないのよっ？」

いくつものカーブを無視しながら、白いワゴン車が猛スピードで走っていく。

「すまん言い忘れていたんだ。まあしかし、今日の君の運勢なら大丈夫だろう。幸運を祈る」

そういつて雄介は無線を一方的に切った。

「コラー、何言いたいことだけいつて、無線切つてんのよー？」

だが、車は下り坂にさしかかると、美香の意思に反して更にスピー

ドを上げた。

「うそー、ブレーキまでっ？」

美香はガツガツと小さな足で必死にブレーキを踏むが、車は一向にとまる気配がない。

そして、まるで闘牛のように車は一直線に壁に向かってつきすすんでいく。

「きゃああああああああ、誰か助けてーっ」

だが、その数秒後、美香の乗った車は見事に岩壁にクラッシュした。グシャツ。

《美香さん、美香さん、起きて下さい》

「う……ん？」

暗闇から導かれる声に美香が重いまぶたを開ける。

「あれっ、私、どうしたんろう？」

だが、ぼやけていた視界が徐々にクリアになると、自分がさっきまで座っていた運転席が目に入った。

「そうか、私、結局事故っちゃったんだ。痛たたたた、けどどうにか生きてみたいね」

すると、フロントガラスの方からいつものダルイ声が聞こえてくる。

《そうっすよ、美香さん、でも礼はいまりせんから、ほおおおおお
おおおお》

「その声はアクアドール。あなたいったいどこにいるの？」

《ここっすわ。ほおおおおおおおお》

そいうと、アクアドールはフロントバンパーからよつきりと顔を出す。

「うそっ、じゃあ、まさかあなた、車の衝突をやわらげるために、間に入ってクッションになってくれたの？」

《そうですよ、ほおおおおお》

美香は事の真相を知ると思わず胸を撫で下ろした。

「ありがとう、あなたのお陰で命拾いしたわ」

《ほおおおおおお》

「おまけに車も大して壊れてないみたいだしね、多分、まだ修理したら使えるんじゃないかな」

そのとき、はるか上空から急降下してくる大きな影があった。ブシューウウウウウウウ。

大きな羽根で風を切り裂きながら、二人の頭上に迫ってくる。だが次の瞬間、車の無線が再び作動する。

「なによっ、もう。肝心な時に役に立たないくせに」
ピッ。

美香が無線の通話ボタンをおすと恭介の声が聞こえてくる。

「一体、何の用？」

「上だ」

「えっ？」

「上を見る。怪人が君たちの頭上近くまで来ているぞ」

恭介に促され、美香が慌てて片方の窓から頭上をのぞくと、2mほどの羽根を広げた怪人が車めがけて突っ込んできていた。

「きゃーーーーーっ」

慌ててドアを開けて運転席から転がり落ちる美香。

そして次の瞬間、鋭いツメが車の屋根を貫いた。

ぐしゃっ。

「な、なによ。一体なんなのコイツ？」

怪人は車の上で制止すると、鋭い眼光で美香とアクアドールを睨みつけた。

「北野美香にアクアドール。ククク、間違いない。貴様ら伊東研究所の連中だな」

「そうよ、あなたは何者なの？」

「私はブラックスターズ四天王の一人、イーグルキングだ」

「うそっ、いきなり四天王が出てきちゃったの？」

「いかにも」

イーグルキングは得意げにニヤリと笑う。

「私は貴様らに復讐をとげるためこうしてこの地へ舞い降りたのだ」
美香は大きいため息をつく、意を決して話し始める。

「あのさー、盛り上がりつてるところ悪いんだけど、今度にしてくれないかな？ 私、いまさらわれた友達を探さなきゃいけないの」
だがイーグルキングはすでに自分の世界に入っていた。

「我らブラックスターズ四天王は、黒星王直々に命を受け……」

「ちよつとー話聞いてる？ 友達がさらわれたの。だからいま私、急いでるのっ」

しかしやはりイーグルキングの耳には届かない。

「ここが貴様らの墓場だ、覚悟しろっ」

「もーっ、結局そうなるわけね？ 仕方ないわ、アクアドール、お願いっ」

《はい。ほおおおおおお》

アクアドールは重い腰を上げると、イーグルキングに向かい合った。

「北野美香、待っていたぞ、我は陸軍隊長の……」

「もういいわ、アクアドール、やっちゃって」

「えっ？」

いい加減、このやりとりに飽き飽きしていた美香は、あくびをしながらアクアドールに指示を飛ばす。

「フン、このワシもなめられた……」

《アクアブレード、ほおおおおおおおお》

だが結局、ウグイス怪人、ホツケキョンは登場からわずか三秒で真っ二つになった。

「うおおおおつ、ていうか、オレの出番少なくなえっ？」

一方、その横で美香は無線機に向かって、大声で怒鳴りつける。

「ちよつと恭介君っ？ いい加減にしてくれない？ もうこれで七人目よっ」

すると電話の向こうから恭介の拍手が聞こえてくる。

「おめでとう。ギネス達成だな」

「めでたくなかないわよっ、誰もそんな記録狙ってないわ」
だが、恭介もため息をつきながら反論する。

「仕方がないだろう。リーダーに映る怪人がみんな怪しい動きをするんだから」

「ったくもう。こっちはあんたのところのボロ車修理して、ヒヤヒヤしながら走ってるんだからね、そろそろお目当ての怪人を引き当ててくれないと困るわ」

美香は車に積んでいた工具ボックスでエンジンのメンテナンスをしながら会話を続ける。

「そんなこと言われてもなー、第一、コレは君のところで作った発明品だろ？」

「何それ、いまさらそういうこと言うわけ？」

だが次の瞬間、闇夜を切り裂く大きな獣の鳴き声が聞こえた。
ギヤーフォン。

美香が上空を見上げると、そこには大きな羽根を広げた鳥獣が黒い影を纏って、優雅に空を飛んでいた。

「あれは何ッ？」

するとそのとき、上空から美香を呼ぶ声が聞こえてきた。

「北野美香だな？」

「そうよッ」

その瞬間、美香の顔がきりりと引き締まる。

「お前の友人を預かっている。返して欲しくばこのプテラノーンについてこいッ」

そういうと、上空を旋回していた鳥獣は、即座に方向転換し、北に向けて飛び始めた。

「待ちなさいッ」

慌てて車に飛び乗りエンジンをかける美香。

だが無線からは、何度も美香を呼び止める恭介の声が聞こえてくる。

「美香君、やめろっ、罨だ、罨に決まってるっ」

しかし、彼女の衝動は止まらない。

「罨でもなんでも行かなきゃいけないの。私と理沙はね、高校になつて初めて出来た親友なんだから。ほら行くわよっ、早く車に乗つて」

そういつて、アクアドールを車内へ促すと、二人はプテラノーンを追つて闇の中へと車を走らせた。

入り組んだ山道を走り続けて、15分。

ようやく上空を飛んでいた鳥獣が旋回を繰り返しながら、地上へと降りてくる。

それと同時に目の前にはゴルフ場の入り口が見えてきた。

「やつと着いたみたいね」

美香はゴルフ場の門の前に車を止めると、颯爽と車から降りた。

駆け寄った門には《関係者以外立ち入り禁止》と書いてある。

「とりあえず、今日のところは関係者よね。悪いけどコレ開けてくれる？」

アクアドールは小さく頷くと、次の瞬間、手に取った鉄の柵がぐにやりと曲がる。

「それじゃお邪魔しまーす」

美香はペコリとお辞儀すると、足早にコースへと飛び出していった。

木々がうつそうと茂る山道と違い、場内は見晴らしのいい平原となっていた。

おまけに夜のパノラマは宝石をちりばめたように燦然と輝いている。だが、その中に大きな翼の生えた一人の怪人の姿が見えた。

「お待たせしたわね、怪人さん」

「フッフッフッフ、全くだ。だが本当にお前を待っていたのはあ

の子だろうか」

そういつて、プテラーノンが林の方を指差すと、美香は木につる草で縛り付けられている理沙の存在に気づいた。全身がきつく縛られているうえ、制服の一部が破れ、血で赤く染まっている。

「理沙っ。あんた一体理沙に何を？」

「腹が減っていたんでね。少しばかり血を頂いたのさ」

「なんですって。それじゃー理沙は」

「心配はいらん、まだ生きているよ。もちろん、これからお前とセツトで料理させてもらうがな」

「許せないっ、アクアドール、こいつをギタギタに叩きのめして頂戴っ」

《了解です、美香さん。アクアブレード。ほおおおおおお》
アクアドールはプテラーノンに向かって全力で斬りかかる。

一方美香はアクアドールに指示を飛ばすと、急いで理沙のもとへかけつけた。

「はあはあ……、理沙、待っていていま助けるからね」

美香は工作用のカッターナイフを取り出すと、理沙の体に絡みついたツルを一本一本切り落としていく。

「ごめんね、ホントにごめんね」

気づくと、美香の瞳からは大粒の涙が零れていた。

だが、次の瞬間、新たな緑色のツルがいくつも美香の体に絡みついてくる。

「きゃっ、なにコレ？」

そのとき、プテラーノンが大きな笑い声を上げながら、美香に語りかけてきた。

「フッフッフッフ、一つ言い忘れたんだがな。その木は人喰い樹というブラックスター星のモンスターでな、不用意に近づいた獲物を捕食する習性があるんだ」

「うそっ、嫌っ。止めてよ」

だが、身動きをとろうにも、美香の両手両足は完全に縛り上げられていた。

「あぁっ……い、痛い」

ギシギシと柔らかい肌につるが食い込んでいく。

「ふん、いい気味だ。おいっ、アクアドール。ご主人様がどうなってもいいのか？」

怪人と一進一退の攻防を続けていたアクアドールだったが、その一言で急に動きを止める。

「ダメよ、そんなヤツに騙されちゃダメ。あいつはここにいる全員を殺すつもりよ」

だがアクアドールはプテラーノンが放った言葉の呪縛に身動きが取れない。

ドカツ、バキッ、ボコッ。

容赦なく繰り広げられる殺戮ショー。

アクアドールの体からは多量の水滴が弾け飛び、みるみるやせ細っていく。

「……アクアドール」

美香は自分のふがいなさに思わず下唇をかんだ。

「私、何やってんだろ、ほんとバカみたい……。一人でいい気になつて……舞い上がって……。結局、誰一人救えないのに」

そのとき、人食い樹の木陰から男の鼻歌が聞こえてきた。

「伊東研究所は世界ツ―、どーこが―凄いかわからんが―、とにかくなんかで世界―」

「きよ、恭介君ッ。どうしてあなたが？」

だが、恭介は美香の問いには一切答えず、手持ちのデジタルカメラでパシャパシャと二人の体を撮り続けている。

「なるほどな―。美香君の体はこうなっているのか」

「ちよつと―？」

「何だ？ 何か用か？」

「何か用かじゃないでしょ。人の体を何枚もカメラで撮っというて」

「何を誤解しているんだ？ いい縛り方だから、ちょっと研究に使うおうと思ってただけだ。すまんが、もう少しだけそのポーズでいてくれ」

「好きでこんな格好してるわけじゃないわっ」

そう言った瞬間、美香はあることに気がついた。

「ていうか、あなたなんでコイツに食われないの？」

「そんなこと簡単さ、たった今、オレが撃ち込んだ毒薬でこの木がくたばったからだ。よしそれじゃ、最後に美香君の太ももをチエツクするでしょう」

だが次の瞬間、ツルがほどけると、美香の足が恭介の顔面に直撃する。

ドカツ。

「あっほんとだ」

美香は自分にまわりついたツルをすべて振り払うと、理沙の救出に向かった。

一方、それを見ていた怪人が恭介に向かって話しかける。

「ついに現れたな、伊東恭介。だが、もう遅いぞ。貴様の最高傑作はこのざまだ」

そういつて、怪人は全身から気の抜けたアクアドールの頭をつかんで恭介の前に差し出した。だが、恭介は驚くどころか、大きな声で笑い始める。

「フフフ……、ハハハハハ」

「な、何がおかしい？ とうとう貴様も狂ったか？」

「狂った？ それは貴様のほうだ。オレの最高傑作がそんなに簡単にくたばると思ったのか？」

「何っ？」

すると、またアクアドールが大きく動き始める。

「バ、バカな。貴様死んだはずでは？」

《僕は無敵っすよ。ほおおおおおお》

そういつて、アクアドールはにゅるりと怪人の手から抜けると、怪

人と向かい合い、再び戦闘態勢に入った。

「冥土の土産に覚えておくがいい、人間の世界には接待というモノがあつてな。わざと力を抜いて、自分より弱い者の機嫌をとることがあるのさ」

「なんだと、このプテラノーンがこんな水人形より弱いというのか？」

「そうだ」

「ゆ、許さんっ」

プテラノーンは口から赤い血を吐くと、それが一瞬にして刃の形にかわる。

「食らえっ、ブラッディソード」
キンッ。

だが、アクアドールもブレードでそれに応戦する。

「フッフッフッフ、そこなくちゃね。こっちも面白くない」

《ほおほ》

「ぐ、なんだその返事はっ？　なんか喋れやつ。戦闘が盛り上がりだるーが」

プテラノーンはアクアドールの剣をなぎ払うと、さらに一步奥に踏み込んだ。

「もらったー」

だが、プテラノーンが至近距離に入った瞬間、アクアドールの必殺技が獲物の体を

蜂の巣にした。

《アクアマシガン、ほおおおおおおお》

「ぐおっ、しまったー。うおおおおお」

プテラノーンの体はボロボロに崩れると、夜の闇へと消えた。

月までが溶けてしまいそうな夜。

二人の綺麗な目をした少女が時を忘れ、大きな木にもたれながら話している。

「今回はホントにごめんなさい」

「えっ、なんで美香が謝るの？」

「すべて私のせいなの。ごめんなさい」

「だから、なんで美香が謝るのかって聞いているの」

美香はモジモジしながら、理沙から視線を逸らしてゆっくりと答える。

「あのね、いま私、世界制服を企む悪の軍団と戦っているの」

「悪の軍団？」

理沙が不思議そうな顔で美香の顔を覗き込む。

「うん、今日、理沙をさらってったヤツらのこと」

「あーあいつらのことかー」

ちよっといたずらっ子のようにふくれてみせる理沙。

だが、美香は今にも泣き出しそうな顔で話を続ける。

「でも、分かったんだ。私、今回のことで反省したの」

「何を？」

「私、このまま理沙と一緒にいたらダメだって。もうこんなことに、絶対に友達を巻き込んだじゃだめだって」

「だから？」

「だから……、だから明日から別々に行動しよっ。そしたらもう誰も傷つかないし、理沙が悪いやつにさらわれることも……」

だが、次の瞬間、理沙の手がやさしく美香の体を抱き寄せた。

「嫌よっ」

「えっ？」

「嫌っ。そんなことで離れるなんて絶対にイヤッ」

「だって、私のせいで理沙は」

「そんなの関係ないよ。私、美香に嫌われるまで絶対に離れないから。私、いまでも美香のことが大好きだから……」

「理沙……」

何よりも温かい友情に触れ、美香もまた優しく理沙を包んだ。
まるでどこまでもつづくこの星空のように。

後日。

美香は手土産を持って恭介の研究所を訪れていた。

「まー今回は色々あったけど、とりあえず礼を言っておくわ」

だが、恭介はきよとした顔でこちらを見つめている。

「なんのことだ？」

「なんのことって、昨日のことに決まってるでしょ。私がつる草に縛られていたところを助けてくれたでしょ？」

「ああ、あれのことか」

美香はなおも上機嫌で話を続ける。

「でも、今日の朝、起きたら悲惨だったのよ」

「どうかしたのか？」

「ええ、全身がひどくカブレちゃって。理沙はなんともなかったみたいだけど……。でも、いま無事でここにいるのもすべて恭介君のお陰だしね、感謝してるわ」

だが、いつもより気さくに振舞う恭介。

「ずいぶん今日は素直じゃないか。だが、礼には及ばん、こっちも、昨晩は、実験に協力してもらったからな」

「実験？」

そついうと、恭介は懷から一枚の写真を出した。

「ちよつとー何よ、コレ？」

写真には下着姿でぐるぐる巻きされた美香の写真が写っていた。

「昨晩はよく眠っていたからな、君の体で『しょうゆ漬け』を試してみたんだ。結果は失敗だったけどな、今度は『うなぎのタレ』で試してみるか？ ハッハッハ……。アレッ、もしかして怒ってる？」

「あたりまえじゃボケーッ」

美香のアップパーカットが綺麗に決まると、恭介の体は天井を突き破

り、人類初めての人型ロケットが誕生した。

第三話 宿命の対決

人里離れた山奥。

そこに静かに、しかし確かな存在感を持ってそびえ立つ、ひとつの洋館があった。

ここはブラックスターズの総司令部、武人館。

そして今、その館の大広間で、巨漢の男が金色の台座に腰かけ、大きな声をあげていた。

「おいっ、誰か。誰かおらんのか？」

彼の名は黒星王。

10年前、宇宙で起きた大爆発により故郷の星を失い、地球へと逃れてきた悲運の異星人だ。

だが彼は持ち前の統率力と明晰なる頭脳で、同じ星の一族を束ねると、いつしか地球侵略作戦の実権を握っていた。

「申し訳ありません」

すると、そこに少し遅れて、メガネをかけたスーッ姿の女性が現れる。

彼女の名前はヒルダ。

肩まで伸びたブロンドの髪に、青い瞳、そして、シルクのように透き通った白い肌を持つとびっきりの美少女。

だが一方では、弱冠16歳にして、ブラックスターズの軍事参謀に登用されたエリートとしての顔も持っている。

「黒星王様、お呼びですか？」

しかし、黒星王はそんなヒルダを容赦なく怒鳴りつけた。

「おいっ、ヒルダ。なぜ、この館にはなぜお前しかおらんのだ？」

説明しろっ」

「ご堪忍を」

女は姿勢を低くして、恐縮しながら頭を下げる。

「いったいどういうことだ？」

「すべて伊東研究所の連中に倒されました」

「なんだと？ それは本当かつ？」

「は、はい……」

「おのれー」

バキン。

黒星王は怒りのあまり、持っていた剣を半分にへし折ると、ヒルダの前に叩きつけた。

「ひいーっ」

恐怖で縮みあがるヒルダ。

だが、黒星王は深呼吸をすると、ようやく落ち着きを取り戻す。

「はあはあ……、しかし、ヒルダよ。王宮内の者が全て死んだということはないんだろう？」

だが、ヒルダは首を大きく横に振る。

「い……いいえ、全員死にました」

「プテラノーンは？」

「前回、死にました」

「それじゃあ、四天王は？」

「それも前回、死にました」

「うそつ。四天王だよつ？ 四天王つてことは四人いるんだよ？」

「はい、残念ですが、前回色々あって、あつという間に死んじゃいました」

「なんだよソレ。なんでそんなに弱いのか？ うちの四天王つて。こつういのつてさー、例え殺されても一話につき一人とかじゃないのか？」

「だからー、人の話聞いてますか？ 前回だけでみんな死んだつていつてるでしょ？」

最初は少しおびえていたが、だんだんと黒星王とのやりとりに疲れ、乱暴な口調になるヒルダ。

「えつと……、それじゃーホツケキョンは？ そうだ陸軍隊長のホ

ツケキヨンがいただろう?」

「はいはい、それも前回、死んだ死んだっ」

「ホントかー?」

「ええ、前回三秒で死にましたよ」

「何ソレ? それじゃ残りのヤツも?」

「そーそー。要するに、名前を呼んだのに来ないってことは、もう死んでるんすよ」

「なにその乱暴な言い方っ?」

その時、黒星王の耳元で、か細い声が聞こえてきた。

「黒星王様、私をお忘れですか?」

「そ、その声は、スケルトかつ?」

「ご名答。」

そういうと、突然、空中から黒いマントを被った長身のガイコツが現れた。手には大きな等身大の鎌を構えている。

「久しぶりだな、スケルト」

「ええ、じつは最近、随分と退屈してましてね。今日はお仕事をもらいにきたんですよ」

すると、黒星王の目が急にぎらりと光り始めた。

「ほう。ならばスケルト、お前にはあいつらを倒す秘策があるというのか?」

「ええ、まあね」

「よし、それではチャンスをやろ。もしあいつらを壊滅に追い込むことが出来たら、お前にこの星の半分と宇宙に一つしかないこのギンレイ石をやろ」

黒星王はそう言う、首からぶら下げたネックレスをスケルトに見せた。

「フッフッフ、商談成立ですね。それでは黒星王様はこちらで吉報をお待ちください」

「わかった」

そう言う、スケルトはまた闇の中へと姿を消した。

それを見て、再び話題を戻す黒星王。

「ところで、ヒルダ、カブトーシンはどうした？」

だが、ヒルダはすでに赤いカーペットの上で女性誌を広げて、寝転がっていた。

場面が変わり、ここは美香の自宅。

ガラス越しにほっそりとした少女のシルエットが映し出され、そばには脱ぎ散らかした彼女の服と靴下、そして中からは柔らかなシャワーの音と共にかわいらしい鼻歌が聞こえてくる。

「フフ、フンフン」

土日の連休を利用して両親は実家に帰っていたため、美香は家でのんびりと一人暮らしの気分を満喫していた。そこへ駆け足でやってくる一人の男の姿。

男は浴室の扉をガチャリと開けると、中にいた少女に話しかけた。

「大変だ、美香君。ついにやつらが動き出したぞ」

湯気は一瞬で消え去り、凍りつく風呂場。

裸の少女が無防備なまま、男と向かい合う。

「……っ!？」

沈黙の中、なおも流れ続けるシャワー。

「……。あのー、これ、食べる？」

数秒の後、男は沈黙に耐えかねて、自分のポケットから袋入りのキヤンディーを取り出すと、少女に手渡した。

「イチゴミルクのキャンディーだ。おいしいぜっ」

さわやかな笑顔で微笑む男。

だが、その直後、洗いたてのきれいな足が飛んできた。

「どこから入ってきたんじゃないっ、お前はっ!？」

パリン。

「あーっ」

男は風呂場の窓から、乱暴に蹴り出された。

十分後。

二人は彼女の部屋にいた。

美香はタオルで自分の髪を乾かしながら、恭介に説教をしている。

「まったくもう、一体どういつつもり、毎度毎度、人の家に忍び込んで。おまけに今日は私の裸まで見て」

「すまない、どうしても君に伝えたいことがあったんだ。しかし、まさか君が風呂に入っているとは思わなかった」

「どんな言い訳？ 一直線で風呂場へ向かってきたくせに」

そういつて恭介を鋭い目で睨む美香。

だが、恭介も必死で反論する。

「しかしだな、よく考えてくれ。就寝中もダメ。入浴中もダメとなると、オレは一体いつ君の家を訪問すればいいんだ？」

「普通の時間帯にすればいいでしょ。何、無理やり正当化しようとしてんのっ」

「この部屋から見える景色には、もう飽きたんだよ」

「不法侵入してるくせに、彼氏的な発言をするなっ。すんごい腹

立つんだけど……」

そんな話を交えつつ本題に入る二人。

「で？ 今日はいつたい何の用なの？」

「ああ、そのことなんだが。ついにあの黒星王が動き出したんだ」

「ブラックスターズのボスが？ そりやまたなんで？」

「前回、君とアクアドールが調子に乗って、四天王とか主要幹部をみんな倒しただろう？ 恐らくそれが原因じゃないかとオレは考えているんだ」

だが今度は美香は必死で食い下がる。

「ちよっと待ってよ、アレは恭介君の指示で仕方なくやったことよ？」

「それでコレを見て欲しいんだが……」

恭介は美香の話を遮ると、一枚の張り紙を取り出した。

「こらっ、無視するな。ていうか何よ、コレ」

「やつらが撒いたビラだ」

「ビラ？」

「ああ、そうだ。読んでみてくれ」

「えーっと、なになに」伊東研究所の諸君に告ぐ、24時間以内に研究をやめて投降しろっ。さもなくば、このあたり一帯に凶悪なウイルスが蔓延し、周辺地域は火の海となるだろう。BY 黒星王」……だつて」

「そういうことだ。だから早く投降しよう」

その場でひっくり返る美香。

「なんでよっ、ここまで来て、なんでそんな結論になるわけ？」

「君はウイルスの怖さを知らないのか？」

「もちろん、知ってるわよ。私だって科学者のはしくれだもん。でもー」

「それじゃあ、やつらが撒いたウイルスがどんなものか知っているか？」

「知らないわ。どんなウイルスなの？」

「人食いウイルスだ」

「人食いウイルス？ まさか人間同士が？」

「その通りだ。こんな風にな」

そういうと、突然、恭介が白い牙を見せて美香に襲い掛かる。

「嘘っ、あなたまでっ？」

美香はバランスを崩してその場に押し倒される。

「うまそうな肉だ。どれどれ味見を」

「きゃっーっ。止めてよっ」

だが、そのとき、とつさに投げた黄色い目覚ましが恭介の頭に直撃する。

ガンッ。

その場に崩れ落ちる恭介。

五分後。

固く閉ざした部屋の前で恭介が必死で弁明する。

「だからー、オレは君にウィルスの怖さを教えようと……」

「はいはい分かりました。男はみんな野獣だっていうことがよくわかりました」

そのとき、1階の玄関から大きな音がした。

ガンガンガン、ガチャン。

玄関の扉が派手壊れる音。

パリン。

「ちよつとー、恭介君、いたずらにしては度が過ぎてるわよ?」

だが恭介は美香のそばで平然と答える。

「何をいつてるんだ。オレはここにいるぜ」

「うそつ、じゃあ今の音は?」

慌てて二階の窓から下を覗く美香。

するとなんとそこには暴徒と化した人間たちが美香の家の玄関を打ち壊していた。

「きゃああああつ、何なの、アレ?」

「だからさつき言っただろ? 共食いウィルスだって。分かったら早くここを開けてくれ」

「わかったわよ。開ければいいんでしょ、開ければ。そのかわり変なことしたら、舌、噛んで死んでやるから」

そういつて美香は、扉の前に積み上げたバリケードをそそくさと片付け始めた。

だがそのとき、美香の部屋のガラスが割れた。

パリンッ。

「きゃああああつ」

「どうしたつ?」

「窓から人がつ」

窓から侵入した女はうつろな目をしながら美香を射程に捕らえると、
ゆつくりと美香に近づいてくる。

「いやっ。来ないで」

美香は近くにあるものを順番に投げていく。

だが、思ったようにうまく当たらない。

やがて女は一気に美香に覆いかぶさった。

「きゃあああ」

パシュツ。

その時、わずかに開いた扉の隙間から、黒い銃口が火を噴いた。

女は胸を押さえながらその場に倒れる。

「ふうー、間に合ったか」

恭介が大きく息をつくとき、美香は、閉じていた両目を開けて、恐る
恐る周囲の状況を確認する。

「あれっ、私、助かったの？」

「『私、助かったの？』じゃないだろう。もう少しで殺されるとこ
だったんだぞ」

「そうねっ、ありがと。いま片付けるね」

美香はそういつて扉の周りにある全てのバリケードを取り払った。
部屋の中にはカッターシャツを着た20代の女が横たわっていた。

「死んじゃったの？ この人」

「いや、一時的に眠らせただけだ。だが、せつかくの拾い物だ。ウ
チの研究所に連れて行こう」

「うそっ？ いやよ、私は。こんなバケモノと一緒に行動するなん
て」

「だが、ウイルスのワクチンを作るにはこの女の体を調べるしか
ない」

「そりゃーそうだけど……」

「いいか？ 君が逃げ回っている間にも犠牲者はどんどん増えてい
くんた。そしてそれはいつか君の家族や友人にまで及ぶ」

「……」

「協力してくれるな？」

美香は小さく首を縦に振った。

王室でゆっくりとくつろぐ黒星王。

そこに駆け足でやってくるヒルダ。

「大変です」

「どうした？ ヒルダ」

「スケルトがブラックスターズの秘薬庫から『1091』を持ち出しました」

「なんだとっ？ あれはまだ治療薬の見つかっていない禁断のウィルス。それをやつが持ち出したというのか？」

「ええ。それからこの紙をご覧ください」

ヒルダが黒星王に一枚の紙を渡した。

「なんだコレは？」

「スケルトが、黒星王様の名前を使って撒いたビラです」

「なんだとー、許さん、今すぐヤツを呼び戻せ」

「しかし、作戦はどうなされます？」

「いますぐ中止だ、中止にしろ」

そのとき、暗闇の中からうつすらと黒い影が浮かび上がる。

「そいつはただけませんか」

「ス、スケルト。どうしてお前がここに……？」

「なに、そこにいるヒルダさんの動きが気になりましたね」

「な、なんだと？」

「誰の指示かわかりませんが、彼女、私のあとをつけていたみたいで」

「ワ、ワシはしらんぞ。それよりもだ。これは一体どういうことだ。説明しろっ」

黒星王はヒルダから受け取った紙をスケルトに突きつけた。

だが、それを見てもスケルトはゲラゲラと笑っているだけだ。

「ゲームじゃないですか」

「ゲームだとつ。貴様、ワシの地位をおとしめるつもりか？ その上、あんな腐ったウイルスまで使いおって」

「地位？ フフフ。部下も自分の星も失った今のあなたにそんなものがあるんですか？」

「何だと、もういっぺん言ってみろ。ワシは由緒正しき黒星王」

「うるさいなー。置物はやっぱ喋っちゃダメだ」

そういうと、スケルトは持っていた鎌で一気に黒星王の頭を跳ね飛ばした。

ブシュツ。

すると次の瞬間、分断された黒星王の首から、線香花火のように大きな黄色い血しぶきがはじけ飛ぶ。

そしてその数秒後には、残された体が失った頭を追いかけるようにゆっくりと王座から陥落した。

ドシャツ。

「き、きやあああああ」

「やっぱこうでなくちゃ」

スケルトは鎌にひっかかったギンレイ石を自分の首にかけると、ゆっくりとヒルダのもとに歩いていく。

「次は君だ」

「ひっ、ひっ……」

屍餅についてゆっくりとその場を後ずさるヒルダ。

だが、次の瞬間、スケルトはいつのまにか彼女の背後に回っていた。「っーかまえた」

スケルトはそういうと、後ろから抱きつき、ヒルダの口を強引に開け、試験官に入った透明の液を流し込んだ。

パシュ。

パシユツ。

恭介の仕込んだ睡眠薬で、家の前に集まっていた人間たちが次々に倒れていく。

「よし、とりあえずこれで研究所にはいけるな」

恭介が倒れた人を端へと寄せると、二人は女を後部座席に置いて車に乗り込んだ。

ゆっくりと発進する車。

「ねえ、でも本当にこの女の人の体を調べるだけで、このウィルスのことが分かるのかな？」

「さあね」

「さあねって……」

「とにかく、オレ達に与えられたヒントは彼女しかないんだ。この際、ヤルしかないだろう？」

「……」

「どうした？」

「あのー、恭介君……なんで私の太もも触ってんの？」

「すまない、つい手が滑ってしまった」

「お前はどこまでエロインじゃー」

ボカッ。

その瞬間、二人の乗った車が大きく縦にバウンドした。

「よし、手足はちゃんと縛ったな？」

「うん」

二人は研究所にたどり着くと、ベージュのリクライニングシートに女性を縛りつけて、注射器でゆっくりと血を抜いていく。

「よしOKだ。ガーゼを貼ってくれ」

「わかったわ」

美香は傷口にガーゼを乗せると、紙テープでしっかりと固定した。

「これでよしと」

一方、恭介は採取した血液をスポイトで移動させると、顕微鏡で観察を始めた。

その恭介に美香が声をかける。

「ちよつと、私、電話してくるね」

「ああ」

美香は駆け足で別室に行くと、携帯のアドレス帳に入っている母親の番号を選択して、発信ボタンを押した。

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル。

（お願い、繋がって）

ガチャ。

だが、何度電話を鳴らしても聞こえてくるのは、留守番電話センターの知らない女性の声だった。

壁にもたれながら、ゆっくりとずり落ち、その場に座り込む美香。

大事な人を想う気持ちがいつしか言葉にならず、涙となって零れていた。

P M 9 時。

ショッピングセンター。

閉店を告げるアナウンスとともに、館内にホタルのヒカリが流れている。

だが、店員の多くが一人の客に翻弄されて、片付けに入れないでいた。

「ちよつと、なんなんですかねー、あの人」

「ホント困るよな。何の用事だか知らないけど」

その視線の先では、一人の男がサービスセンターの女に詰め寄って、話を聞いていた。

「昨日までここの特設ブースで酒を販売していたはずなんだが……」
「ええ、ですから、昨日でキャンペーンは終了したんですよ」

「それじゃあ、担当者の方のお名前とかはわかりませんか？」

「すいませんが、個人情報になるのでー」

「だったら、そのお酒、何てメーカーかはわかりませんか？」

「店長、何かご存知ですか？」

困った女は後ろの席にいた男に詳細を尋ねる。

すると、その男はカウンターの近くまでやってきて、客の応対に回った。

「えーっと……、確か、黒蜜酒造の白ワインじゃなかったかな」

「黒蜜酒造ですか？」

「ああ……」

「いま、そのサンプルとかは残っていませんか？」

「サンプルっていつてもねー。昨日のモノだからねー、捨てちゃったんじゃないかな」

そういつて、男はカウンターの下側を覗き込むと、ガサガサと探し始めた。

そして一分後。

「おーあつたあつた。そういえば、向こうの人にお礼につて、ただでもらったんだよ」

男はそういつと、酒の入った瓶をテーブルの上に乘せた。

「私用にもらったもんなんだけど、残念ながらあまり飲めなくてねー。よかつたらお持ちください」

「えつ、本当にいいんですか？」

「ええ」

「申し訳ない、それじゃ何かお礼を」

「そんなのいいですよ。そんな高いものじゃないですし。また時間をみておこし下さい」

そういつて店長は男の機嫌をとると、店の外まで追い返し、店は一斉に閉店作業に入った。

美香が研究室にもどつてくると、恭介はまだ顕微鏡の前で血液を相手に格闘していた。

「何か分かった？」

「まだなにも分からんな」

「正体がつてこと？」

「ああ、それにこの伝染のメカニズムもだ」

「吸血鬼みたいに牙痕からの粘膜感染じゃないの？」

「もちろん、それもあるにはあるだろう。だが、共食いをさせるのに粘膜感染というのは、どう考えても非合理的といわざるを得ない」
「どうして？」

「例えば、固体Aがウイルスに感染し、固体Bを襲ったとしよう。だが、襲われた時点で、固体Bは絶命しているか、瀕死の重傷を負っているかのどちらかだ。ここから感染のネットワークを広げていくには、かなり無理がある」

「そっか、人を食うウイルスだもんね。襲われたやつが生きているわけがないんだ。えっ、てことは、空気感染した可能性があるってこと？」

「いや、それもなし。事実、君の家の周りの住民はかなり汚染されていた。もし空気感染でうつるんだとしたら、家にいた君はもう感染していなくてはならない」

「ふーん、てことは、逆に言えば、このウイルスの発生元を押さえることが出来れば、こいつらの繁殖は押さえられるってこと？」

「ああ。そういうことだ。いまの段階ではまだ謎だらけだけどな」

そのとき、研究室のドアがガチャリと開いた。
二人の緊張が一瞬にして高まる。

だが、そこに立っていたのは恭介の父親、雄介だった。

「恭介、無事だったか？」

「ああ、父さんは？」

「この通りだ。おー、美香君、来てたのか？」

雄介は足早に美香の真横に並ぶと、気さくに話し始めた。

「今回は、大変なことになったね」

「はい……。あのー」

「ご家族は無事かな」

「いえ、まだ誰とも連絡が取れていないんです。それで……」

「それは心配だな」

「はい……。ていうか、何でさっきから私のお尻触っているんですか？」

美香に注意されて、大げさに驚く雄介。

「おっと、すまないっ、思わず手が滑ってしまった。いい尻だったから」

「よくわからん言い訳すんなーっ」

美香のブレーンバスターが決まると、雄介はマットに沈んだ。

「そう怒らんでくれ、美香君」

そっぽをむく美香を必死になだめる雄介。

「普通、怒るでしょーが？ こんな時にベタベタお尻触られたら」

「悪気は無かったんだ。君の気分を少しでも和らげようと思って」

「余計ナーバスになったわ。このエロ親父」

「わかった。この通りだ。すまなかった」

そういつて深く頭を下げる雄介。

それを見て、美香の顔からも徐々に怒りが消えていく。

「もー別にいいけどさ。今回の事件は大きすぎて、どーせ私達だけじゃ手に負えそうにないし」

「ああ、それはこっちも同じでね。私は別に、今日、美香君のお尻を触りに来たわけじゃないんだ。私もそれほど暇じゃなくてね」

「そんなの当たり前でしょ？ ていうかその言い方、物凄くムカつくんだけど……」

だが美香の発言を無視して会話は流れる。

「実はな、今日、大変面白い情報を仕入れてきたんだ」
雄介の発言に、思わず互いの顔を見合わせる恭介と美香。

「黒蜜酒造？」

「ああ、私の調べたところによると、今回の騒動を起こした全ての人が、百貨店などで、あるメーカーの酒の試飲をしていたことが分かったんだ」

「それが黒蜜酒造？」

雄介がゆつくりと頷く。

「そしてこれがサンプル品だ。」

雄介はシヨップिंगセンターで店長にもらった白ワインの瓶をテーブルの上に置いた。

「恐らくこのボトルの中に、その原因となるウイルスが繁殖しているはずだ」

「それじゃ、その中のウイルスを調べれば、簡単にワクチンが作れるってこと？」

「ああ。」

一方、場面は変わって。ここは山奥にある廃工場。

真っ黒なウェットスーツを着た戦闘員達が、ウイルスに感染した人間達を台車つきのオリに乗せて、施設の中を移動していく。

それを管制塔から眺める一人の男。

「クツクツクツ。ようやく手駒が揃ってきたようだな」

そこに一人の男が駆け足でやってくる。

「スケルト様、ヒルダ嬢が到着されました」

「そうか、ではここへ連れて来い」

ヒルダは全身を一枚の白い布でまとい、呆然とそこへ立ち尽くしていた。

「待っていたよ、ヒルダ」

スケルトはヒルダを抱きかかえ、細い顎をつかむと耳元でささやいた。

「お前はなんて美しい顔をしているんだ、それにこの透き通るような白い肌。まるでお人形さんのようだ」

だが、ヒルダは魂を抜かれたように身動き一つしない。

そしてぱちりと開かれた碧眼の目は、世界を映す役目を忘れ、彼女を彩る宝石としてキラキラと輝いている。

「いいかい、お前は助けが来たらこう叫ぶんだ。『助けてください、私、死にたくない』とな。」

ホラ言つてごらん、早く」

スケルトにそういつて体を揺らされると、ヒルダはボソボソと話し始める。

「たす……け……て……くだ……さい。わた……し……し……し……に……
……たく……な……い」

だが、スケルトはなおも調教を続ける。

「ダメだつ。もっと速くだ」

「たすけて……ください。わたし……しに……たく……ない」
「もっと」

「たすけてください。わたし……しにたくない」

「ダメだダメだ。セリフに感情が入っていないぞ」

「かん……じょう？」

それを見て、またスケルトがケタケタと笑い出す。

「おー、そーだったそーだった。ヒルダ、お前はワシに感情を抜かれていたんだつたな」

そういうと、スケルトはヒルダの口を開け、彼女の犬歯に赤い義歯をはめ込んだ。

「ヒルダよ、助けが来たら、そいつにしがみついて思い切り噛みつくんだ」

「かみ……つく？」

「そう噛みつくんだ」

スケルトはジェスチャーを交えて、彼女にゆっくりとレクチャーする。

ガチッ、ガチッ。

上と下の歯が力強くかち合う。

「そうだ、ヒルダ。それでいい。偉いぞ」

数分後、スケルトが満足そうに指導を終えると、ヒルダは呆然としたまま、トボトボと檻の中へ帰っていった。

そこにもう一人の戦闘員がやってくる。

「スケルト様、街で暴れていた感染者100人をすべて納入いたしました」

「ご苦労」

「それから、檻はどうしましょうか、一人ずつ分けておいたほうがいいですか？」

「その心配はいらん。何度も実験したが、どうやら感染者同士は相殺しないようになっていたみたいだ」

「わかりました」

そういうと、戦闘員は駆け足でスケルトの前から姿を消した。

「だめだ。なにをどうやってもワクチンが出来ない」

血液の入ったビーカーの前で、愕然とする恭介。

時計はすでに午前4時を回っていた。

「アプローチの方法が悪かったのか？」

机の上には、研究所にあるすべての薬液が並べられていたが、すべて組み合わせても解決策

となる方法は見つからなかった。

そこにあくびをしながら、美香がやってくる。

「恭介君、少し休めば？ 体に毒よ」

だが首を横に振る恭介。

「いや、まだだ。解決の糸口さえ見つからないからな。誰かさ

んみたいのにのん気に寝てられないんだ」

「なんか言葉にすごいトゲがあるんだけど」

そういうと、美香は近くにあった椅子に腰掛けた。

「それにしても、意外だわ」

「何がだ？」

「恭介君で、普段はとんでもなくエロエロなのに、研究のこととなると目の色がガラッと変わっちゃうんだから」

「どういう意味だ？」

手を止めて、むっとした表情で美香の方をむく恭介。

だが、美香は平然と話し続ける。

「聞いた通りよ。私なんかいくら研究に集中しようとしても、お腹がすいたら、途端にコンセントレーションが乱れちゃうんだから」

「なんだ君もこの人と同じクチか？」

恭介がリクライニングで眠る女性を指差すと、美香は慌てて否定する。

「そんな言い方しないですよ。私はどんなにお腹がすいても、人間を襲ったりしないわ」

「ほんとか？ 怪しいもんだな」

「ホントよ。もしお腹がすいて何もなかったら、私は自分の足を食べるわ」

「ハハハ、そんなバカな。タコじゃあるまいし」

だが、次の瞬間、恭介は自分の言った言葉を反芻すると、机に向かって研究を再開した。

「そうかつ」

「えっ、どうしたのよ？」

「わかったんだ。ウイルスの撃退法が」

「ええっ」

三時間後。

空にはまぶしい太陽があがり、小鳥たちがさえざりながら空に向かって飛んでいく。

一方、研究室からは喝采を叫ぶ恭介の声が聞こえてきた。

「よし、完成だ」

恭介はシャーレーに貯めた薬液を注射器に詰めると、女性の腕に注入了。

それを心配そうに見つめる美香。

「これでこの人は治るの？」

「ああ、多分な。ただこのワクチンはまだ試作品だからな。薬が効くまでにおよそ半日は

かかってしまう。その間、患者が彼女のようにじっとしていてくれればいいが」

じっと見つめあう二人。

「悩んでいる時間はないしな」

「そうだね、街へ戻ろっ」

「ああ」

そういつて二人は荷物を整えると、颯爽と表へ飛び出していた。だが、その様子を影からみつめる一人の男がいた

二人が地上に戻ると、美香と恭介の住んでいた街はあちこちで火の手が上がり、廃墟と化していた。

もくもくと黒い煙が上がり、遠くではサイレンの音が鳴っている。

「ひどい……」

力無くその場に倒れこむ美香。

「これが……私の住んでた街？」

その美香に恭介が手を差し伸べる。

「何を落ち込んでいるんだ？ これぐらいのことは覚悟してたはずだろ？」

「うん……、でも」

だが、恭介は遠い空を見つめながら、ゆっくりと美香に語りかける。
「今、この瞬間にしか出来ないことがある。そして、それは現在、

過去、未来を通じて、いつも同じだ」

「……恭介君」

「美香君、君はいま過去の自分が何も出来なかったことを悔いているんじゃないのか？」

「……」

「だが、今なら、それが出来る」

美香は唇を嚙むと、ゆっくりと、だが、力強く恭介の手をとった。

「やけに人が少くない？」

美香の言うとおり、街にはほとんど人の存在感が感じられなかった。

「ああ、ホントにゴースタウンみたいだ」

その時、目の前にある家でガレキの崩れる音がした。

その場で立ち止まる二人。

「いいか？ イチ二のサンで踏み込むぞ」

「わかったわ。」

恭介と美香は目線を合わせると、呼吸を整える。

「イチ二の」

「サン」

崩れかけた家の壁を一気に曲がり、正面になだれ込む。

『動くなっ！！』

二人の声が一つに重なる。

だが、その直後、二人の前にかわいらしい少女が現れた。

「撃たないでっ」

「理沙っ!？」

数分後、街には小さな笑い声がこぼれていた。

「ハハハ、なんだビックリした。誰もいないと思ってたのに、理沙がいたから」

「ビックリしたのはこっちよ。美香の声がしたと思って表に出たら、急に銃を突きつけられたんだもん」

恭介も頭をかきながら謝る。

「それはすまなかった。ところで理沙君、みんなはどこへいったか知っているか？」

すると、理沙は急にまじめな顔で語り始めた。

「はい。実は昨晚、大きなトラックが何台も来て、ウイルスに感染した人をさらって行ってしまったんです」

「なんだって？　すると他の人も？」

「いえ、他の人は近くの小学校にすべて避難していたので無事でした。それから」

理沙は一通の封筒を恭介に差し出した。

「おそらく二人に宛てたものだと思うんですが……」

中には、廃工場への案内図と一枚の脅迫状が入っていた。

「これは一体どこに？」

「私、昨日の夜逃げ遅れて、家の中でじっとしていたんです。そして、さっきの人たちがやってきて、しばらくしてトラックが帰ったのを確認して表に出たら、コレが落ちてたんです」

「『伊東研究所の諸君に告ぐ。PM8:00に廃工場跡へ来い。さもなくば人質100人の命は無い』か。ずいぶんと挑発的ね。まっ、お陰で相手の居場所を探す手間が省けちゃったけどね」

流れてくる風に髪をなびかせながら、美香は脅迫状をビリビリに破いて窓の外へと捨てた。

「ああ、だが畏には違いなだろうけどな」

「ええ、でも私達にはもう選択肢がないもんね」

白いワゴンは大きく軋みながら、山道を走っていく。

「ただ人数分のワクチンは持ってきた。もし相手のボスと刺し違えることができれば、最低でも、」

「100人の命は救える」

「本気で言ってるの？」

「ああ、わざわざこんなところを舞台に選んだんだ。絶対他にも何かあるだろう。しかも相手は黒星王だ」

美香はわずかな沈黙の後、かすかに笑みを浮かべて尋ねる。

「ねえ、恭介君は、今日、誰のために戦うの？」

だがその質問に早々と首を捻る恭介。

「さあ。正直、オレもよくわからんな。実際、その100人には会ったことはないし。陳腐な言い方をすれば世界平和だろうけど。美香君はどうなんだ？」

「もう美香でいいよ。私はね……。私は……」

そこまでいうと、美香の心の中で色んな人の笑顔が浮かんできた。

「私も平和のため……かな」

「なんだ一緒か」

「ねえ……もう一つ聞いていい？」

そのとき目の前の信号が赤に変わり、恭介がブレーキを踏んで車を停める。

「なんだ？」

「あなたは本当にブラックスター星を破壊したの？」

「なんでそんなことを聞くんだ？」

「知りたいの。ダメ？」

無色の空が闇を抱き寄せたところ、美香と恭介の乗った車がひっそりと工場跡に到着した。

だが、後部座席から荷物を降ろす二人を突然、たくさんのスポットライトが包む。

「地獄のディナーショーへようこそ、伊東恭介・北野美香」

「結構なもてなしだな。感謝するぞ。貴様が黒星王か？」

額に手を宛てながら、わずかな視界を頼りに恭介が答える。

「ハッハッハッ。残念ながら、黒星王は死んだよ」

「なにっ、死んだ？」

「ああ、この暗黒王、スケルトの手によってな」

そういうと、大きな鎌を構えた黒装束のスケルトが二人の目の前にゆっくりと舞い降りる。

「フン、内輪もめか。見苦しいな」

「なんとも言う方がいい。この世で一番美しいものは勝利だけだ。そして貴様らも今日ここでオレに敗れ、その醜い敗者となるのだ」
そういうと、スケルトはその場からふっと姿を消し、代わりに目の前にある8つのドアがいつせいに開く。

バタンツ。

中からはウイルスに感染した人間達が両手を前に突き出し、二人のほうへやってくる。

「いきなりかよっ。」

美香と恭介は持ってきた注射器を手製の小型銃に装着すると、飛び掛ってくる人間達を片っ端から打ち落としていく。

パヒュン、パヒュン、パヒュン。

「美香君、分かてると思うが、百人に対して弾は百発しかない。最低でも相手の体のどこかには当ててくれよ」

「うん。でも、打ち落とした直後に、みんなが寝てるのはどういうこと？」

「ワクチンに睡眠薬を入れて撃ってるんだ」

「なるほど、それでかー。わかったわ。世界平和目指して、一緒に頑張りますよ」

美香と恭介は二手に分かれて、人間達に応戦した。

一方、それを二階の渡り廊下から眺めるスケルト。

「フン、人間どもが調子づきおって。おい、例の作戦の準備だ」
「はっ」

戦闘員はスケルトに敬礼をすると、急いで1階へと降りていった。
「フッフッフ。奴らめさぞかし驚くだろうな」

折り重なる人の山。

そのそばで、背中を合わせる二人。

「美香君、これで何人だ？」

「さあ、50人くらいじゃないかしら？」

「それじゃー残りの半分は？」

「もうすぐ出てくるんじゃない？」

すると、そのとき、一つの扉から、白い服をきたあどけない顔を
した少女がはだしのまま、こちらへと向かって歩いてくる。

「美香君、油断するな。早く撃つんだ」

だが、少女は美香に向かって大声で叫ぶ。

「たすけてください。わたし……しにたくない」

「えっ、普通の人間っ？」

そして、その直後、少女の背後から現れた人間達が一斉に彼女に襲
いかかる。

「危ないっ」

美香は自分の危険もかえりみず、少女の前に飛び出した。

「やめろ、美香、罠だ」

しかし、美香は少女にまわりつく二人の人間を見事に打ち落とす
と、少女を自分の手で
しっかりと抱きしめた。

「大丈夫？」

「う……」

だが、少女の意識はなぜか朦朧としていた。

そしてさらにそこに二人の男女が襲い掛かってくる。

「美香、後ろだっ」

その瞬間、とつさに彼女の体が反応する。

パシユツ。

「サンキュー、恭介君」

わずかな時間差で、美香の注射針を受けた二人の人間が倒れる。
ドサツ。

「あんまり心配かけんなよな」

「へへへ」

だが、次の瞬間、美香の左腕に激痛が走った。
ガブツ。

「えっ」

美香がゆっくりと視線をおろすと、その先では少女が赤い牙をむき出しにして、必死に美香の腕に噛み付いていた。

「嫌っ、うそっ」

そういつてなんとか少女を強引に振りほどいた美香だったが、やがて、ゆっくりと意識が遠のいていく。そしてその代わりに、頭の中に新たな指令が書き込まれる。

『ヒトヲ、タベロ。ヒトヲ、タベロ』

「いやあああああああ」

『ヒトヲ、タベロ。ヒトヲ、タベロ。』

わずかな力で必死で幻覚を振り払う美香。
そこに恭介が駆け足でやってくる。

「美香っ、大丈夫か？」

「いやああっ、来ないでっ」

「どうしたんだ？」

「来ないでー。私、あなたを食べてしまう」

「なんだって？」

恭介は美香の体に出てきた牙痕を確認すると、愕然とした。

「まさかアイツに噛まれたのか？」

美香は最後に小さく笑って頷くと、恭介を突き飛ばした。

「痛っ！。美香っ。おいっ待てよ、美香」

だが、恭介はふと気づくと、自分自身が敵の重囲に落ちていること

に気づいた。

「美香、どうやらオレタチは最悪のシナリオを書いちゃったみたいだな」

そういつて、恭介は狂人と化した人の波に切り込んでいった。

ナメクジのように男がずるずると、体を引きずって歩いていく。

体の皮の大半を剥ぎ取られ、全身が真紅に染まっていた。

目の前には人の残骸がいくつも転がっている。

だが、彼らがいきているかどうか、もはや男に確認する術は無い。

「はあはあ……、美香……」

視線の先には、少女のような目をした一人の女がいた。

「おいっ、美香……」

その声に少女はいつもと同じ笑顔で微笑む。

だが、その目はまるで獲物を見つけた獣のように、どこまでも邪悪で。純粹だった。

「美香、オレを……食べる。」

「タベルッ、タベルッ？」

すると恭介の言葉を理解したのか、彼女の瞳孔が大きく開いていく。そして、次の瞬間、一気に男に飛びかかった。

勢いに押され、壁にたたきつけられる恭介。

ドカッ。

「グフッ」

美香はゆっくりと恭介の体にまたがると、えぐれた部位を好んで食べ始める。

ボリッ、ボリッ、ボリッ。

「よし、いい子だ。」

恭介は美香のふとももの裏をまさぐりながら、ぶすりと注射器を差し込んだ。

「んん……」

その場で激しく痙攣を起こす美香。

「夢から醒めたら、オレの仇をとってくれよ」

恭介はそこで力尽きた。

五分後、ゆつくりと目を覚ます美香。

「う……ん？」

だが、様子がおかしい。

いつもより膨らんだ自分の胸。

よく見ると、恭介が美香の服にもぐりこんでブラジャーの上から美香の胸を吸っていた。

「ちょ、ちよつと、なにしてんのよ、アンタは？」

美香は頬を赤く染めて、恭介の顔を自分の胸から引き剥がすと、恭介の顔に強烈な張り手をお見舞いした。

バシッ。

「う……。」

しかし、美香に舞い降りた悲劇はこれだけではなかった。

次の瞬間、美香の背筋が一気に凍りつく。

彼女の体に怒涛のように押し寄せる危機。

美香はゆつくりと視線を後ろに移動させると、恭介の左手が美香のパンツの中に侵入して、柔らかな尻を撫で回しているのが見えた。

「なるほど、あなたがピーチ姫だったんですね？ どうりで柔らかいはずだ」

おまけによく分からない寝言まで言っている。

怒りでわなわなと震える美香のコブシ。

当然、恭介が怪我をしているという状況は完全に忘れさられ、ダイヤモンドより固い彼女の

鉄槌が容赦なく彼の顔面に振り下ろされた。
ガンッ。

「仕方ないだろ、瀕死の重傷だったんだから」

「どこがよっ？ 本当にさっきのナレーション通りだったら、アンタはもう死んでなきゃ、おかしいのよ？ それなのに、なに便乗して、人の体ベタベタ触ってんのよ？」

だが恭介は極めて真面目な顔で反論する。

「君は何か誤解しているのかもしれないが、別にオレは尻を触っているつもりはなかったんだ。ただ夢の中で、すもも王国の王様がピーチ姫に会わせてやるって言うから、お言葉に甘えて、ピーチ姫の尻を触っていただけだ」

「結局夢の中でも、尻触ってんじゃないっ。ていうか、なに人の尻を使って気持ち悪い夢みてんのよっ」

だが、その時、工場内に大きな爆発音が響いた。
ズドン。

入道雲のように黒煙が空へ向かって伸びる。

一瞬にして二人に緊張が走る。

「えっ、なに？」

「分からん」

だが、爆発は立て続けに起こる。

ズドン、ズドン、ズドン。

「いったいどうなっているんだ？」

そのとき、建物の二階から男の声がした。

「ここの施設は完全に破壊した。逃げるぞ、恭介」
バーンッ。

燃え上がる大きな炎に照らされると、油まみれになった男の姿があらわになる。

雄介だ。

「父さん、どうしてここに？」

「おいおい、命の恩人に対してそれはないんじゃないか？」

「命の恩人？」

ゆっくりと階段を降りて、二人のもとへやってくる雄介。

「ああそうだ。オレがお前のワクチンを改良してなかったら、今頃お前は、美香君に

食い殺されていたんだからな」

「なるほどそういうことか」

「とにかく、どちらにしても詳しい説明はあとだ。住民達を連れて帰るぞ」

「ああ、でもどうやって？」

「工場の前にトラックが置いてある。それを使おう」

『そうはいかないよ』

その時、炎の中から黒装束をきたスケルトがゆっくりと浮かび上がる。

「ス、スケルトッ」

「よくもやってくれたね？ 私の地球侵略の野望を」

スケルトはゆっくりと三人の前に舞い降りると、大きな鎌を振りかざして戦闘態勢に入った。

「絶対に許さんぞ、貴様らっ。今すぐここで皆殺ししてくれるわっ」

その時、美香の声が、暗闇の中に響き渡る。

「アクアドール、出番よ」

すると、ワゴンの屋根を突き破って、アクアドールが現れた。

《ついに出番ですか、ほおおおおおお》

「そうよ、あいつを倒して頂戴」

《了解です。ほおおおお》

アクアドールは大きな体でスケルトの前に立ちはだかった。

「フッフ、君がアクアドールか？。うわさには聞いていたが、ちょっとがっかりだね！。

まだ前回の連戦の疲労が残っているみたいじゃないか？」

《そんなことないっすわ。ほおおおお》

「フン、強がるならそれでもいい。この鎌を受けてみるがいい。魔炎波」

そういうと、スケルトの鎌から青白い炎がスクリー状に飛び出してくる。

《こんな技、よければしまいですわ。ほおおおおお》
それをさらりと避けるアクアドール。

だが、スケルトの一言で状況は一変する。

「バカめ、お前の後ろに誰がいると思っている?」

《あつ、美香さんっ》

「きゃああああつ」

ブシュッ。

数秒後、美香がゆっくりと目をあけるとそこには、盾となり右半身を失ったアクアドールの姿があった。

《……》

「アクアドールッ」

《ちよつと、今回の敵は手ごわいっすわ。ほおおおおお》

アクアドールは持てるパワーを全て駆使して、高速で体を再生する。だがそこに、さらにスケルトが鎌で切りかかってくる。

「アクアブレードよっ。アクアブレードで防いでっ」

《了解です、美香さん、アクアブレード。ほおおおお》

美香の命令に即座に反応するアクアドール。

しかし、スケルトの鎌は一瞬にしてにアクアブレードをへし折った。パキンッ。

「おっ、折れたっ、アクアブレードがっ」

「甘いわっ。回復にパワーを使っている時点で、お前の技など恐るに足りんわ。死ねっ」

銀色の鎌が鋭く光る。

「逃げてっ、アクアドール」

その時、急にアクアドールの体が激しく点滅した。

《アクアフラッシュッ。ほおおおお》

「うおっ、眩しい」

あたり一面が真っ白にそまり、それが数十秒の沈黙を作り出す。

そして光が止んだとき、アクアドールはようやく再生を終えた。

「ぐぬぬぬ、こしやくな」

だが、スケルトは手で顔を覆いながらも、新たな技を繰り出してくる。

「かまいたち」

すると急に目の前に、大きな空気の渦2つあらわれ、四人の周りを高速で移動する。

「何だこれは？」

しかし、恭介がそう叫んだ瞬間、あっという間に恭介の体は渦の中へと巻き込まれ、ギザギザに切り刻まれていく。

「うおおおおっ」

「恭介君っ」

「ハッハッハッ、どうだかまいたちの威力を思い知ったか？」

「もう、許せない。アクアドールッ。マシガンよ。マシガンを
お見舞いして」

美香は張り裂けんばかりの声でアクアドールに指令を出す。

《了解です。美香さん。アクアマシガン。ほおおおおおお》
数百万という水の粒子がスケルトに向かって飛んでいく。

だが、次の瞬間、すべての粒子がスケルトの体をすり抜けていった。

「う、うそっ……」

「ハッハッハッハッ、まだ分らんか？ この私は不死身なのだ」

「そ、そんな……」

目の前のショッキングな出来事に美香は完全に戦意を喪失した。

ボカーン。

大地を揺らす大きな振動で少女はゆっくりと目を覚ます。

目の前には黒い服をきたガイコツと人間達。

必死に今までの記憶をたどるが、結局、何が起きているかは分からない。

途方にくれた少女はゆつくりと立ち上がり自分の体に手を伸ばしていく。

頭、顔、首、体、手、足。

だが、その途中で太ももに冷たい感触があった。

慌ててスカートをめくる。

そこには白い肌とは不似合いな黒い鉄の塊。

「あ……う」

必死に自分の知っている言葉で答えを探そうとするが、答えは見つけ出せない。

だが、不思議と使い方は理解できた。

少女はゆつくりとその塊を手にとると、黒い標的に照準を絞る。

目が霞んではつきりとは見えないがいまの少女にとって、それは大した問題ではない。

バンッ。

大きな爆発音とともに、火薬の甘い匂いが少女を優しく包むと、空中に浮かんでいた黒い標的はバランスを崩して地面へと落下した。

ドサッ。

「……ピストル？」

少女は自分が持っている武器の名前を口ずさむと、満足そうにその場に倒れた。

「ヒルダああッ、き、貴様あ、よくも裏切ったなー」

スケルトンはわき腹を押さえながらゆつくりと立ち上がると、再び闇に同化を始めた。

だがそれを見て、すかさず美香がアクアドールに指示を飛ばす。

「そうかさっきのはホログラム（立体映像）だったのね。チャンスよ、アクアドール」

《美香さん、了解です。ほおおおお》

そういつてアクアドールは、スケルトの正面に立つと、集中砲火を

浴びせた。

《アクアマシンガン。ほおおおおお》

アクアードールの全身から放たれるダイヤモンドの粒子が、よろめくスケルトの体をハチの巣にしていく。

「ぐおおおおおおお」

砕け散る骨片。

そして、ボロ雑巾と化した体は、風に遊ばれると、一瞬のうちにねじれて消えた。

張り詰めた緊張。

大きな沈黙。

呆然とその場に立ち尽くす美香。

だが、やがて、小さく美香がつぶやく。

「や、やった……」

しかし、そんな声では、とうてい喜びは表現できない。

もう一度、大きく息を吸い込み、声を出す。

「やったわー、恭介君。私達、とうとうブラックスターズのボスをやっつけたのよ」

だが、恭介の返事はない。

「えっ、恭介君？」

心配そうに周囲を見回す美香。

だが、どこにも見当たらない

「どこ行っただのー？ 恭介くん」

結局、美香が恭介を発見するのは、これから五分後のことだった。
「助けてくれー」

そう、恭介はまだ「かまいたち」にやられていたのだ。

AM6:00

ブロロロロ。

バツファローのように、大きな鼻息を立てて、10トントラックが工場に集まった人々を飲み込んでいく。

運転席から聞こえるのは雄介の声。

「これで全員か？」

「ああ」

そういうと、雄介は荷台の扉を閉め、山道を降りて、街へと帰っていった。

それを高台から眺める二人。

「ふぁーあ、何とか片付いたわね」

美香が大きなあくびをすると、恭介もつられてあくびをする。

「なんかこうしていると、すべてが嘘だったみたいだな」

「そうね、特にこんな朝陽をみたら」

ようやく笑顔をとりもどす美香と恭介。

だが、その直後、背後で、何かが地面を蹴る音が聞こえた。ザッ。

ゆっくりと振り返る二人。

「動かないでっ」

そこには銃を持った少女、ヒルダがこちらに狙いをすましていた。

「あなた、伊東恭介ね？」

「？……ああ」

恭介は両手を上げて答える。

「あなたに消されたブラックスター星の仇、いまこそ取らせてもらうわ」

だが恭介は静かに微笑むと、両目を閉じてその場に立ち尽くす。

「好きにするといい」

すると、美香がそれを止めに入った。

「ちょっと待ちなさい」

「そこをどいてっ。怪我したいのっ？」

「いいから、私の話を聞いて」

銃口を構えたまま、ヒルダは美香の話に耳を傾ける。

「何よ……話つて。早く言つて」

美香は小さく頷くと、覚悟を決めて話し始めた。

「実はね、あなたが住んでいた惑星は、自然に消滅したのよ」

「な、なにいつてんのよ。出鱈目いわないで」

「いいえ、ホントよ。あなたのいた惑星はすでに寿命を迎えていた。うそだと思うなら、このペンダントを見なさい」

美香は先ほどまでスケルトが身に付けていたペンダントをヒルダに手渡した。

「これのどこが？」

「裏面に書いてあるでしょ？ 『惑星消滅の危機に伴い、新惑星の探索を命じる』 って。つまりあなたたちの本来の任務は、伊東恭介や地球への復讐ではなく、爆発寸前の星に変わり、自分達が住むことのできる新たな星を探すことだったの。そのために黒星王は地球に降り立った」

「うそよっ。それじゃーなぜ、黒星王は伊東恭介と戦っていたの？」

「黒星王がこの星を支配する前に自分達の住んでいた星が爆発してしまっただからよ。しかしそのことが公になれば総司令である自分の立場が危うくなる。そこで思いついたのが、伊東恭介が作った人工衛星に罪を着せることだった」

「そ、それじゃあ私達は……一体何のために」

その場でゆっくりと銃を下ろすヒルダ。

だが、次の瞬間、ヒルダは一気に自分のこめかみに銃口を当てた。

「もう、私……ダメみたい」

「死んじやだめー」

急いで、取り押さえようとする美香。

だが、ヒルダの銃は大きな音をたてて、弾丸を発射した。バーン。

ゆっくりと舞い上がる硝煙。

美香が恐る恐る閉じた目をゆっくりと開く。

するとそこには、ヒルダの両手両足を取り押さえ、馬乗りになった恭介がいた。

「どうして……死なせてくれないの？」

横を向いたヒルダがポツリとつぶやく。

「私にはもう住んでいた星もない。家族も友達もない。ずっとこれから先も一人ぼっちなのよ」

恭介は握力を失ったヒルダから拳銃を奪い取ると、ゆっくりと立ち上がった。

「帰る場所がないならそれでいい」

「無責任なこと言わないでよ、あなたに一体、何が分かるって言うのよ？」

「正直、何も分からない。ただ昨日までの君は、今死んだ」

「えっ……？」

仰向けになったままヒルダが恭介の方を向く。

「そして、その命はいまこの瞬間からオレのものになった。だから、これから君にはオレの

出す全ての命令を聞いてもらう」

「そ、そんなの横暴よ……」

「横暴でも何でもいい……」

そういうと、恭介は小さく笑って続けた。

「生きてくれ」

ヒルダが恭介の言葉に息をのむ。

「今、なんて？」

「オレが憎いなら憎んでもいい。ただそのためには一つ条件がある、君は何があっても

生きぬかなければならない。そして、いつかにその手でこのオレに復讐を果たすんだ」

そういうと、恭介はゆっくりと歩き始めた。

だがヒルダは立ち上がると、恭介に向かって罵声を浴びせる。

「あんたバカよ……」

「そうだ」

「とんでもない大バカッ」

「それでいい」

ヒルダは声をつまらせながら、大声で怒鳴り散らす。

「何、考えてんのよ。私はあなたを殺そうとしたのよ。それなのにどうして私を許せるの？ どうして私が憎くないのよ？」

だが恭介は、不意に立ち止まると、ヒルダに背を向けたままつぶやいた。

「君の傷が癒せるならそれでいい」

その時、初めてヒルダの頬に一滴の涙がこぼれた。

エピローグ

一ヶ月後。

美香の住んでいる街では、失踪していた人や避難していた人がそれぞれの家へと戻り、荒廃していた街並もちよつとずつではあるが活気を取り戻しつつあった。

とはいえ、人間が同じ人類を襲って食べたという今回のショッキングな事件は、街にまだ大きな影を落としていた。そのため、現在もウイルスの被害者に対する偏見や誤解をなくそうと、伊東研究所が中心となって講演会などが数多く行われている。

そんな中。

美香と理沙は、今日も仲良く二人揃って下校していた。

「えっ、それじゃあ、今も、そのヒルダっていう宇宙人は一緒の研究所にいるの？」

「うん、そうなの。お陰で研究も結構順調にすすんでるわ」

「ふーん、でも凄いなー。宇宙人と一緒に生活してるなんて、なんかマンガの世界みたい」

「でも、結構普通だけだね。ねー、よかったら今からウチ見に来ない？」

「えー、本当？　じゃーっ行く行く」

そういつて二人は意気投合すると、早速、研究所に押しかけた

ピンポン。

だが誰も出ない。

「おかしいなー。今日はどこも行かないって行ってたのに」

美香がそういつてスペアキーで玄関のドアを開けようとすると、中から急に女の悲鳴が聞こえてきた。

声の主はヒルダだ。

「嫌ですっ。やめて下さい」

「ハッハッハッ。何を言ってるんだ。あるとき、『君の命はオレのもの』って言っただろ？　つまりオレの命令は絶対なんだ。さっ、分かっただら、早くあのイスに座してもらおうか？」

「絶対嫌です。そんなことしたら、私の体が壊れちゃうもん」

「ほー、この家でオレに逆らうっていうのか？」

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

「仕方ない、こうなったら実力行使だ」

ガチャン、パリン。

「きゃああああ、変態科学者に殺されるー」

「フッフッフ、いくら叫んでも無駄だ、今日は、君と僕の二人しかいないんだからね」

ドアの前で押し黙る二人。

「け、結構、変わった研究してるんだね？」

「そ、そうなの。普段はいい人なんだけどね」

だが、部屋の中からは、依然としてヒルダの泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

「いやあああああつ」

ドンドンドンドン。

ガチャガチャガチャ。

「誰か助けて、誰か助けてよー」

「無駄だよ、カギはすべてこのリモコンで操作してるんだ。さあ、もう無駄な抵抗はやめて、二人で実験の続きをしようじゃないか」

「いやああああ」

泣き叫ぶヒルダの声が徐々に小さくなっていく。

おそらく地下の研究所に連れて行かれたのだろう。

「なんか今、宇宙人さん、嫌がってなかった？」

「き、気のせいじゃないかな？」

そのとき、雄介が二人の前に現れた。

「やあ、美香君、今日も勉強かい？」

「はいつ。まーそんなところです」

「研究熱心だね。おや、ところで、そちらの子は？ 実験台……、

いや学校のお友達かな？」

「はい、そうなんです」

雄介の質問に会心の笑顔で切り返す美香。

だが、その隣では理沙が青白い顔をしている。

「美香、この人、いま私のこと『実験台』とか言わなかった？」

「やーねー理沙、聞き間違いよ、聞き間違い」

「そっかー。そうだよな？ 私、疲れてるのかなー？」

その時、研究所のドアが急にガチャリと開いた。

「いやー……っ、助けて」

中からはリモコンを手に持ったナース姿のヒルダが駆け足で走って

くる。

「待ってくれ。まだデータが二回分足りないんだ」

「いやよ、あと二回もデータとったら、私、ホントに死んじゃうもん」

その様子を見るに見かねて、美香が止めに入る。

「ちよつといい加減にしなさいよ。ヒルダがいやがつてるじゃない？」

ヒルダは怯えて美香の後ろに隠れている。

「大丈夫だつて」

「あんたが大丈夫でも、被験者が嫌がつてたらダメなのッ」
すると、恭介が美香の顔をじつと見つめる。

「……な、何よっ？」

急に照れて赤くなる美香。
だが。

「分かった。それじゃあ、君が協力してくれ」

そういつて恭介は強引に美香の体を抱きあげると、奥の部屋へと入って行く。

「ちよつと待つてよ、離してっ。今日は友達が来てるのよ。」

「そんなものは後回しだ、いやーそれにしても君は実にはいい体をしてるな、実験にはもってこいだ」

「どんな褒め方してんのよっ？ 放せ、この変態ッ」

「フッフッフ、変態か、いい響きだ。しかし、いくら暴れても無駄だよ。君の弱点なら、もうわかってるんだからな。ここそこだろ？」

「きゃあああー、どこさわってんのよ。スケベ」
ドカツ、バキッ、ボカツ。

そんな二人のやり取りに冷や汗を流す理沙。

「だ、大丈夫なんですか？」

「心配いらん。いつものことだ」

「それだつたらいいんだけど……」

そういつて、少し安心した矢先、部屋の中から恭介の声が聞こえてくる。

「父さん、そこにいる理沙っていう女の子も連れてきて」

「えっ」

一瞬にして、背筋が凍る理沙。

だが、次の瞬間、理沙の体は軽々と持ち上げられる。

「きゃーっ」

雄介の腕の中で必死に暴れる理沙。

「わかった。今、連れて行くよ」

「ちよつと、やめて下さい、一体何をするんですか？」

「何つて、実験だよ」

「実験っ？　なんで私がそんなことを」

だが、雄介は満面の笑顔で答える。

「人類のためさ。」

「そんなの知らないわよ。その前に私の人権を守ってー」

「大丈夫だって。死にはしないから。さあ、行こう、人類の新たなページをこの手で開くために」

「いやあああああっ」

ボタン。

そうやって玄関のドアがふたりをゴクンと飲み込むと、いつしか研究所はいつもと変わらない笑い声に包まれましたとさ。めでたしめでたし。

つて。ホントかつ！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4731v/>

FLAVOR OF THE SCIENCE

2011年8月5日18時17分発行